097996−000−2

特64−352

三遊亭円遊滑稽落語集

小野田　翠雨／編

M43

DBT−0189

三遊亭圓遊滑稽落語集

東京大學館發兌

264
808

特64
352

はしがき

圓遊は近世落語界の奇才である。圓喬名人と雖も人氣に於て圓遊の敵でなく、小さん、左樂一方の雄なれども其人盛遠く圓遊と肩を比ぶることは出來ぬ。圓遊の落語はダラシが無く他愛もないやうだけれど、其ダラシが無く他愛の無いところに價値があるのだ。今や渠は白玉樓中の人となつた流麗な然も奇拔な落語を聽くことが出來ないのは、[illegible]

（また彼樣な水準のものを[illegible]）

ことが出來るのだが今次圓遊落語集の刊行に當つて往時を追想して一言を卷首に題したのである。（翠生記）

43. 6. 20

目次

○故三遊亭圓遊身上噺……一
○野晒……七
○梅見の藥罐……三四
○粗忽の使者……五六
○貂……八四
○果報の遊客……九一
○錦魚の御拜謁……一一七
○素人人力……一三一

目次終

○成田小僧……一五八
○滑稽義士傳……二一六

若旦那落ちぶれて車夫となる
幇間
イヨーッ若旦那お久しぶりでコレい驚いた
助けて呉れー
お客様
殺ーい
アレー

三遊亭圓遊滑稽落語集

小野田翠雨編

故三遊亭圓遊身上噺

左の談話は圓遊子が未だ世に在りし時予に語られしものなり　〔翠雨生〕

▲圓遊は神田紺屋町の紺屋の倅で竹内金太郎と申しまして、是れで

も生粋の江戸子でございます、子供のうちから落語が好きで何うしても手の先を青くして染物などをして居る氣はありません、そこで家を弟に讓つて身を落語界に投じましたが、隨分苦しい修業をしました。

▲其の頃三遊亭圓朝さんが芝居話で大層賣出して居たので、圓朝師の門に入り、圓朝さんが眞にシンミリとした人情話をやつて客を泣かせる、圓遊は其前に高座へ上つて誠に他愛もない毒にも藥にもならないお話をしてお客を笑はせる、圓遊がお客の氣に入つたのはステテコを躍つたのが始まりでございます。

▲圓遊ステテコ、談志の釜堀りテケレッツノパ」と俗歌にまでうたはれました位で、圓遊のステテコと、談志のテケレッツノパとは其當時自慢ぢやありませんが、場内割れるばかりの喝采でございました

圓遊のステテコは色々種類がありまして、立つたステテコ、座つたステテコ、横のステテコ、竪のステテコ、いざりのステテコ、生酔のステテコ、病人のステテコ、士族のステテコ、町人のステテコ、金持のステテコ、貧乏人のステテコ、澤山ございますが、其中でも得意なのはいざりのステテコ、生酔のステテコ、此の二つなんざアお客を隨分笑はせました。

▲夫れから圓遊の愛嬌なのは此の鼻でげす、高座へ上ると此の大きな鼻を右の手がツルリと撫でる、お客様が『もう一度撫でろ』と有

仰る『能い來た』と一度撫でる、お客樣が『もう一つ負けろ』と有仰る、お負けを一つ撫でる、今度は『附錄ッ』と有仰る、附錄に又撫る『號外ッ』と有仰る『宜しいッ』と號外に又撫でる、何んでも高座へ上つてから五六度は鼻を撫でます、夫れから鼻の講釋を始める。

▲『エ、圓遊の鼻は御覽の通りはなはだ大きい、然し人間萬事はなの世の中、兎角世間ははなに酒、はなかしこ、はなかしこ……』なぞと下らないことを言つて誤魔化して居てもお客樣はお喜びになる。

▲圓遊の新作の落語は、地獄旅行、素人人力、成田小僧、野晒し、

ナレ〳〵、全快、藥力、金魚の拜謁、梅見の藥鑵、天產株式會社、明治の浦島、龍の旅行などて、兎角落語の新作といふものは六ケしいものでございます。

▲落語などは猶更時勢に合はして往かなければならぬもので、其の新作をやるものが今日の落語家に皆無であるのは何んとも嘆はしい次第であります、然し新作が六ケしいと云へば云ふものゝ、少し頓智を利かせば直ぐに出來る、譬へば男女同權といふ言葉が流行れば

男『ヤイ〳〵女房、なんだつて手前は俺の留守に芝居へ居つたり寄席へ居つたり遊んでばかり居るんだ』　女『お前だつて毎日毎晩家に居たことがないぢやないか』　男『亭主が遊んで歩くたつて女

房さで家を留守にする奴があるものか』女『イヽエ男女同權だよ』男『生意氣なことを言やがる』ポカリと女房の頭を擲くる　女『エヽ口惜しい〳〵、同權だ〳〵』と突然亭主の向臑へ喰ひ付く、是ちやア同權でなくつて狂犬でございます。

と言つたやうにやれば宜いのです。

▲圓遊が柳橋へ藝者屋を出したり、いろ〳〵失敗した可笑しいお話も澤山ございますが、大底新聞や雜誌に出ましたから申上げません

野晒

エヽ、野晒といふお笑いを一席申上ます、さて此頃は殺生を好むお方が澤山御在遊ばしまするが、夫は山へお出掛に相成ますか、亦は海へお出に成るといつて、大分表を運動旁々二等の鐵砲をお肩に掛て立派な洋犬をお連に成りまして、お腰の周圍へ煙硝やら用意の丸抔をお着遊ばして、スコッチの鳥打帽子、同じくスコッチの背廣の洋服といふ扮裝で、手に西洋杖抔をお持ち遊ばして、立派なお身扮りでお出に成りまするお方が澤山お在遊ばします、殺生は其段々と馴

れるに從つて面白く成るといふ、朝早くお起に成てからに山に入しつて、筒先を向けてポン〳〵……那の音は聞ても溜飲が下るといふ、だが餘まりお身拵のお立派な方は次第に由ると、中には下手なのが有りますんでげして、然し當今では皆モー御前方がお上手に成り遊ばしたが、多くの中には未だ下手なのが有ります、此下手な人に鐵砲を付けられるのが、鳥仲間の方に聞て見ると一番困るさうで、其筒先を向ても一つ所へ向てゐないで、鳥が何方へ逃て好いのか分らないてへます　雉子『おい來たぜ烏』　烏『何う爲たい雉子』　雉子『那奴が來ると何方へ逃て好いか分からない何んてへ鐵砲の打方を爲て居やアがるんだらう、ポーッと放すとお寺の本堂へ打込で、門柵

陀の頭を飛して仕舞ひ御住職に掛合れて、損害を出すなんてへのは餘り好い者ぢやアございません、然しお上手に成ると　甲『向ふへ往つて中らんのが鐵砲は不測だ、なんていひ升が覘ひを付たら外れるもんで無いといふ、或は伎倆が確かに成ると面白い樣に、得物があるのは結構だが得物がなくつて詮方がないから　甲『只歸るのも口惜しいから少し運動をして歸らう』　乙『然り此身拵を藝者や何かに見せて遣り度い』といふので金春から向島、公園(淺草)から吉原下谷を通つて牛込を歩いて赤坂を廻つて、品川へ往て新宿を烏渡見て、落膽爲て家へ歸つて一週間寢るなんてへのは餘り好いもんぢやア有りません、然うかと思ふとは臺場沖へ朝早くは船を御注文に成

て、脚立と申しまして、鳥渡其足場を組だ樣な鹽梅しき、此上に乘て釣を爲る中には脚達を炬燵と間違へて、炬燵を持出したので至極困つた樣なお話しを承はりましたが寒くない樣に山着といふ筒袖のお召、冴道具は五十三圓六十五錢取られたなんといふ奴を、肩に掛てお火に焦るのを少しも拂はず奥樣やお孃樣が　女『此頃は家の旦那樣は色が黑くお成遊ばして御縹緻が惡くお成遊ばした抔と、御當人より妻君の方が氣を揉むなんてへのが多うげす、だが那の釣に參りましても年來遣つて居ると、誰が何所へ來て釣て居るといふのが分る、さうで圓遊仲間にも大層有升、其内に釣の方で有名の先生は、市川團十郎抔は大層釣が熱心で芝居がお休みに成る直に出掛る、也

ウ此位に成ると釣てる餌が動かないと申ます、お魚の方で以て心得てゐる　魚『おい堀越さんが來たせ、堀越さんぢやア義理にも喰すば成るめへ、何うだい、いなだ交際に食はねへか　い『いなだなん仕方が無へ、是から餌を喰て魚が理議で引掛る、然し吾々では然う巧くは行ません、黑沙魚に引張られて粟喰て引上るとたんに自分の頭へ針を引掛けて、好い白痴を釣ちまうんだから一番好い位のもんだが、釣の好きな人は戸外を歩いて居乍ら、向うより來る人が魚に見ゐるといひます、只モー手に蝙蝠傘でも西洋杖でも持てゐれば、釣てる氣合が有るといふんでげして『釣ますか抔と惡が二人寄る』釣をしてゐる人を書師が白痴に譬へて畫て有ますが、全く釣をして

ゐる人達の顔付は何うも、勅任官に成りさうな顔搆はない樣に思はれますが、何でも向ふに精神を奪はれた位甚いものは有りません　八『旦那大變寢坊でございますなあ、此位戸口を敲くのに何も起きないてへのは驚いた、トン〳〵〳〵　八『モシ旦那へ旦那ア……　主『戸口を激しく敲くのは、お隣家の八さんぢやアないかい　八『エ、八さんでケスヨ　主『何だへ私のいふ通り和郎もさん付に爲て、頭領かい……　八『頭領ですヨ　主『呆れたねへ今明升よ、平生寢坊な男で十時でなくつちやア起きた事がないのに今日は何うしたんだ和郎は人を擔いで不可ませんヨ、頃日も蕈燒をしてゐたら、鐵道馬車の三階が來たといふから、飛起きて見たら

ないから聞いたら上總の鹿野山で拵へてゐる、三階馬車は上總山だといつたぢやアないか、一昨日も旦那早く明てお呉んなさい火が燃てるからといふから、エ、何所かに燃出したと聞いたら釜の下がヲヨロ〳〵燃てるなんて、和郎人を擔いて不可ませんよ、今明るから然んなに敲かなくつても好いヨ　八『エ、早く明てお呉んねへ、トン〳〵〳〵、緒方清十郎さんが戸を明ると叩いて居たんだから堪りません緒方の頭をポカリ　清『痛い、どうもお前は酷いねへ私を打擲て何だい　八『默つて旦那何かお呉んねへ　清『どうも酷い人もあるもんだ、謝罪らうとはしないで何か呉れろといふのは何いふ譯だい　八『和郎さんはねへ何うも乃公ァ貧乏に、なつちやッ

て釣をするのが道樂だッて、いふんで頻りに向島なり百本杭なり、木場の方へ行くんだなんて釣竿擔いちやア出るが、和郎さん元には武家だつていふが嘘が上手でげすねへ、此長家は三十八軒あつて根次をするので、二十六軒移轉ちまつて小哥はヅウ〳〵しく居るんだ大屋がクズ〳〵いつたら引移す事が出來ねへから、移轉料を呉れろつて金子の二十兩も取る氣でゐるのさ　清『酷い人だなア　八『和郎さんも移轉料はなし、行先もないから矢張斯う遣つて居るんでげせうけれとも、旦那和郎さんの化るには驚いたねへ、毎日釣りに行くといつちや、不潔衣頭に不潔帶さ、不潔紙入に不潔下駄、不潔外套に不潔帽子……　清『オイ〳〵人の身拵をいふのに、一々顕へ不

潔を付る奴があるかい　八『いつたつて拵ふもんか　清『亂暴だなア私は身拵は惡くとも、腹に錦を着てゐる了見だ　八『へエー和郎さんは腹が小錦に似てゐる……　清『然うちやアない腹の中は立派なもんだよ　八『餘り立派でも有升まい、貧乏占者みたいな身拵をして、餌箱を以て沙魚を釣て遣るから待てゐろ、鮒を遣るから待てゐろと毎日〳〵カラどうも、小哥は魚も何も食ねへで葱や大根を買て、待て居たが沙魚少なの大根澤山、葱澤山の鮒呉れずと來ましたらう、何にも呉れねへのは酷いねへ　清『イエ和郎に得物があつたら福分をして進げやうと思つてゐるんだが、何うも得物がない此頃に木場へ往て海老でも釣て進げやうヨ　八『巧くいつてらア横着

者奴、近所の交番除なんだ和郎さん婦人の所へ行くんでげせう

清『何ですへ……　八『行ねへてへ事さ……昨夜は少とも寢られねんだ、又昨夜はどうも蚤が食やアがつてネ、蚊がブン〳〵小哥の家の蚊帳は蓬萊の蚊帳でゲスからねへ　清『何だい蓬萊の蚊帳へのは　八『鶴と龜が舞込むといふんでげさア　清『飛だ處で洒落るぢやアないか　八『何うも驚いたんでげす蚤蚊に責付られて、寢るにも寢られずモジ〳〵してゐると、和郎さん處の騒ぎなんだ……能く來たなアハア左樣か、一人では物騒だつたノーヲ、然うか車にも乘らんで……ハアーなんて、和郎さんがグヅ〳〵いつてゐたが相手は女に違へ無へが男饒舌りの女饒舌らず、なざア餘り優待てゐ

るんぢやア無へと思つたが、那人やア何でげすえ、權妻か娘か乳母アか藝者か女郎か何でげすエ　清『ヤお前に然ういはれると面目ないが、扨は私の處へ一人の婦人が來たのを早くも壁越でお氣が注たか　八『殘らず證據が擧つちまいました、何でげすエ昨夜來た女は……　清『和郎だから決して隱しはせんが、實は八さん斯ういふ理由だよ　八『ヘエー然ういふ譯でげすかエ　清『未だ何にもいはない　八『道理で聞えない　清『昨日私が向島へ釣をして歸らうとする時に、打出す淺草寺の六時の鐘が河に響て陰に籠つてボーン……と聞えたと思ひなさい　八『話しを然う陰氣にしッ子なし、嫌やに斯う話しを締るねへ　清『突出す鐘の音凄く四方の山々雪解て下

を流るゝ隅田川、浪の音さへ最高くドブウリ〳〵と、岸邊を洗ふ上汐南は物凄いものだなア　八『然うでゲスか夫から何うしました

清『スルと葭がザワ〳〵〳〵と、風に押されモコー寢るのを堤を歩き乍ら見ると、何となく淋く成て來たよ　八『ヘエー……　清『スルトネ　八『ヘエ　清『バッと出た物があるから驚いた……オイ〳〵然う無暗に、人の家の物を懷中に入れちやア困るよ　八『逃る時に唯逃るのは口惜いから拾づたんです　清『人の家から物を拾ふ奴があるもんか　八『頃日郵便函を拾ひましたが、此奴ア重くつて困巡査さんに叱られたが、一番拾ひ良いのが柱時計でゲス　清『何うも此人は驚いた、全で竊盜だネ　八『イヱ未だ洋氈は拾はないん

で　清『和郎位物の理に疎い人はない　八『未だ袂へ湯呑が二ッ這入つて升　清『オヤ少とも氣が注なかつたよ、早く出してお仕舞ひ成程何うも手品使ひだよ　八『葭ん中から旦那何が出たんです

清『中から烏が出た　八『戯談いつちやア不可ません、和郎さん大仰にいふから何が出たのかと思つたら、烏でゲスかへ　清『ア、……翼音に氣が注て葭の中を見ると、一ッの髑髏が有つたと思つしやい　八『ヘエー酒が這入つて居りましたかい　清『白痴だなア夫りやア德利だヨ、髑髏……屍サ　八『ヘエー赤羽根へ往つたのかい　清『困つた人だなア、人骨があつたのさ野曝しが……　八『どうも秀逸い　清『分らねへな未だ……　八『ヘエ何でゲスへ

清『分らないのに賞る奴があるものか、水に溺れた者がありました水死佛が　八『へエー　清『未だ分らぬへと見えるな　八『勿論……　清『勿論ぢやア無いせ、骨がありました土左衛門が　八『どうも驚いたねへ、種々な土左衛門が名を付やアがつて　清『默つてお聞ヨ、私が憐れに思つたから手向の回向をして遣つたテ　八『どうも酷い事を遣りましたな、狸を食つたなんてへのは……和郎さん狸に目を注る位だから、裏の洋犬を追馳たのは和郎さんでげせう　清『回向したんです　八『猫覗ひましたなア　清『アレ爲様が無いなア、五文字七文字五文字の歌を吟んで遣つた、小野小町が歌にも『我からだ燒な埋るな野に棄て瘦たる狗の腹を肥せよ』とある

『骨かくす皮には誰も迷ふらん皮やぶれゝば斯の姿よ』と一休和尚の歌にも有るから、私が其眞似をして『骸骨の上を裝ふて花見哉』では無い『野を肥せ骨のかたみのすゝき哉』と浮びました　八『へエーお前さんが……夫から……　清『夫から私は持てゐた酒を骨へ掛て遣りましたが、好い功德を爲た、功德を施して來た心持は好いえて、慈善法体といふ事に成て來ました、何うも好い心持で宅へ歸つて來て、トロ〳〵と爲ると戸口を敲く者が有る　婦人の聲で、

八『來たんでげすかへ……　清『とたんに打出す　八『オツト辨天山で打つ鐘が陰に籠つたんでげせう　清『憚り樣だねへ　八『淺草寺の鐘がボーン……と來ました、スルト芝の鐘は金が這入つてゐる

からコーンと來ました、上野の鐘がボーンと來た鐵道馬車がトヲー〳〵と來た赤馬車がカラ〳〵ンと來た、交番の傍でチャーンと來た火事は大火く成る せ、ワーアイ……清『オイ氣違り抔を入れるといふのは驚いたなア　八『夫からどう爲ました……　清『話しを聞くんなら間へ、チャラを入れては不可ないよ……女の聲でトン〳〵と戸を敲くから怖々乍ら誰方と聞きましたから向島の葭の中から來たといはれた時には凄然と爲たなア　八『へエ……　清『扨は最前の手向を爲て遣つた闘鶏に就て、狐狸の類が氣を曳に來たと思つたから、此りやアどうも油斷は出來んと思つたから、突然夜具を後へ刎退ました　八『話しは正直に爲て被下な、旦那所に刎退度くも

夜具蒲團抔ア無いぢやア有りませんか　清『然う一々揚足を取ちやア困るぢやア無いか、さア來いと私は得物を持て身構ひをしました　八『いふ事が巨大いね、小哥は湯屋の佐兵衛さんに聞きましたが、上野の戰爭の時逃出して、三河島の溝へ轉げ落たてへますが眞實ですかへ、溝から上陸つて嚔をしたら鼻から鰌が飛出したつていひますねエ　清『詰らない事を聞て來たぢやア無いか……八さん和郎杯そこには、那の時の光景は實に見せたかつたよ　八『だけれど餘り縹緻が好く無へね　清『否さ然うぢやア無い、其時の戰爭の有樣を……土橋の下へ隠れた時に官軍勢が錦の御旗を押立て、長い毛の甲冑を被つてどうも實にマンテルズボンで、草鞋穿で通られた時

には凄かつたね　八『戦ん時は靴抔に不可ねへといひますが然うですかねえ　清『何うも該品は工合が惡いね……何だつて鐵砲が頭の上をヒユーく〳〵と飛で來るんだから、今にも首が無くなるから存命てゐる空は無かつたが、マヽ、今日憲法發布迄吾々が存命るといふは御同前に目出度いなア　八『胡魔化しちやア不可ねへ夫からどうしたんです　清『私がさア來いといふんで得物を持て立上り、大入道か一ッ目小僧だと思つて戸を明ると十六七の娘がな　八『然うでゲスか　清『ヲヤ〳〵困つたねゑ急須を踏潰して仕舞つたせ　八『ゑ免ねへ家から持て來ますから　清『急須何ぞは和郎ん所に有もしない癖に……離れてお聞き、然う傍へ寄て來ちやア困る　八『ヘエ

し　清『文金の高髷で緋鹿子の切を掛て木履かな駒下駄を穿て、見惚る樣な別嬪が優しく兩手を突てひふには、妾は不運な者で河で果まして、那んな所へ屍を晒し行く所へも行く事が出來ませんで、迷つて居ります所へ今日圖らずも、貴郎に手向を受まして漸う浮ばれましたから、今晩は鳥渡其お禮に昇りました、お腰なりとも擦りませうと優しくいはれたには驚いた　八『ヘエ……何うも實に……ハアー……（泣く）　清『泣なくつても好いぢやア無いか、コレサ亦た何か懷中へ入るよ、怖い時悲しい時何にか持て逃られて堪る者か　八『亦發覺つた……夫から何う致しやした　清『其所で私は考へた、恨みを受る理由も無し幽靈何ぞといふ者は無いと思

つたが斯ういふ事も有る者かと思ひましたが、別に氣味の惡い事は無い且又婦人と寢やうが、此方に嫌味さへなければ搆ふ事は無いから、其婦人と並んで寢ましたが、だが……然し『蘭菊や狐にも爲よ此姿』と思つたなア、如斯女を一人で寐かして置くのは勿体無いと思つたね　八『打擲るよ此ン畜生……　清『亦這出して來たよ此人は……夫からウトリとすると和郎に起され、四邊を見ると女はゐないから少し驚いたが、昨夜來た娘は全く那者は幽靈だ　八『へエー然んな事が有るかなア　清『有るとも無いとも保證は出來んね　八『ちやア何でげすかへ、竿を擔いで毎日出るのは魚計りかと思つたら、然ういふ女を探しに歩くんでげすね有難うございやす、然う

いふ事なら直に酒の算段をして是から然ういふ別嬪を探して來やせう　清『オイ〳〵困つたねえ何所へ行のだへ、默つて乃公の釣竿を擔いで行つちやア不可ない　八『少し貸てお呉ん爲被……八さん何と思つたか話しを半分聞て、一升のお酒を提て向島の土手へ遣つて來たが　八『何うも斯うエヘッヘ、有難へな、大鮒釣てゐやアがる、烏の出るのを待てゐやアがるんだらう、グズ〳〵爲ると踏倒すせ……チヤーンと心得てゐるんだ何を吐しやアがるんでへ…………（鼻唄）ポンと突出す鐘の音は、陰に籠つて上潮南物凄く烏が飛出しや骨が有るサッサア……　釣人『大變な奴が來やアがつた、と皆な逃て仕舞ひました　八『ハ、、、皆が逃げちまやアがつた……

モー出そうなもんだな、ヲツに烏か出やアがつた……さアお光來被爲た、烏かと思つたら椋鳥も出やアがつたせ、ハ、烏も多忙いもんだから椋鳥を頼んだんだな、斯う成つた日にやア恐ろしい、是が娘の骨だらうと思つて酒を打掛て大きに、六十二か八十の婆アさんが（老婆の聲色）御免被下まし抔と來られちやア叶はねへ……斯うドン〳〵皆打掛るよ、ヤア誰か辨當を覗て行やアがつた何だか明て見て遣れ、何だい油揚のお菜だな、忘れて行た奴がガンモドキで道理であいつが、ガンモドキのやうな顔をしてゐやアがる、健全で歸りやアがつた……何爲ろ姐さん骨乃公の家は門跡樣の前で、屠屋と豆腐屋の裏をズーツと這入ると、突當りの家が小哥の家で、隣家

が緒方といふ人だ酒肴を揃へて待つてゐるよ、未だ何か聞せる文句が有るんだが、其奴ア聞た積りで賴むぞ承諾かい骨、左樣なら……今夜屹度來てお呉れ』と酒や辨當を腰に提て獨言をいつて八さんはフイと歸つちまつたが、壁に耳德利に口、葭の蔭に屋根船が一隻繫いで有まして、其の船に怪しい割間が一人お客に拋擲られて、眠氣は差て來たが寢るにも寢られず、起てゐれば、話し相手は無いといふ、船頭を供に連て旦那樣が他所へ往ちまつたといふんで、少し何うも割間も厭氣てゐる所でげしたから、八さんの獨言を聞くとも無しに聞きまして『此りやア恐れ入つた、普通の所では人目が有るといふんで、女房の中へ曳入れて今夜來いのお約束を爲てゐるのを

僕が聞くてへのはお金子の儲かる時節でげす、いや有難い悉皆聞て仕舞ました、何か頂戴といふ樣な事をいへば、幾らか儲かるだらうが此所でお金子を貰ふ樣な事ちやア、藝人の風流が無いねへ面白く無いや、今夜家へ出掛て行う、家は門跡の前で屠屋とハア豆腐屋の裏をずうつと、這入つて突當りの家だつて……有難いな今夜先方へ行やア、チン〳〵鳴でデレ〳〵してゐるよ、其所へ拙が今晩はつてへ樣な事をいつて行やア、大變に儲かるよ旦那にお暇を戴いて、一ッ出懸やう、飛だ奴に聞れました、此方は聞れた事は少しも知らないから、七輪の下を煽いて待てたが、待れるとも待身に成るな、容易には聞ません　八『如斯に待て、來ないてへのは弱つたな……

モシお隣の旦那萬一門違ひで和郎さん所へ來たら、此方へ廻してお呉ん被爲……何をしてゐやアがるんだらう、愚圖〳〵してゐるぢやア無か……然んな言をいつてゐる所へは免遊ばせと、來たら何うしやう口ぢや強い事をいつてるが、婦人に關係ると乃公ア惚いからねい……貴郎今日は有難う貴郎々々といはずに、コを呼でお呉ん被爲、だつて名を知らないから仕方が無い、八五郎アレ嬉しい事八さん妾は往年から、思戀てゐたんだが其吉日を待兼て、和郎の姿を畫に描せ見れば見るほど美しい如斯殿御と添臥の……　對『話し聲が爲るが來たんでげすかへ　八『未だげすよ……オヤ戸口に足音が爲るよ、御入來ん成たんですかへ　對『ヤー……　八『大

變な懸聲だ……ヤー抔をいつてゐるのは向島から來たんですかへ

封『其事々々　八『愈よお出で被爲た……アノお隣りの旦那へ來ま

した、遂々縁が國結ちまいましたよ……姉さん無暗に這入つちやア

不可ねへ、今髪散へ油を注て鳥渡頭でも撫付るから……きアお這

入んなせへ、極りが悪くつて其方へ向ねへや(俯伏て頭を隠す)

封『何うも今日は誠に……エ、最少と早く參堂度かつたんでげす

が、彼是時間を費して漸う伺ひましたが、然し結搆なお住居で、入

口で蛛蜘の巣が顔へ懸つて少し冷り凄然としたが、亦此方へ這入つ

て見ると實に骨董家の好く家でげすなー、天井の無い所の容子から

屋根裏がずうつと見えて、蜘蛛が耶鄲夢の枕の戯を演つてる工合は

花待得たる今日の對面といふ趣きが有ますな、竹の柱に茅の屋根(鼻

唄)酒屋へ三里豆腐屋へ二里目に青葉耳に鐵砲、郭公自由自在に聞く

里は……つてへ樣なお住居だ、流板が腐つて蛙飛びの容子から、

やすで　蚰　行列の鹽梅しき何うも好いねへ、淺草に蚊が無くなれば

師月哉……好いお佛壇が有ますな、此品やア氣に適た素麺箱を横

にして、德利の花立に蛇貝の線香立は嬉しい、此何うも壁へ張た新

聞が泥土と一緒に離れて、吊下つてゐる工合……オヤ此敷物は見

た樣な敷物、ア、新橋の鐵道で一錢の貸蒲團が、度々紛失するとい

ふ事を聞てゐたが、此方へ五六枚來て居ますなア、然し山水が有る

は感心だ、此家に山水がありますと『裏ずまいすれど此家は風情あり

質の流れに借金の山か、私も來たからにやア只は歸りませんよ、どうでげせう一ツ癪病踊りといふ奴が遣付やせうか　八「エ、恐ろしい鼻の大きな口の惡い骨が來たが、汝一体何所の者だ　幇「斯う見えても新朝といふ幇間でげす　八「ハアーそれでは葭の中のは馬の骨であつたか。

梅見の藥罐

エ、相變らず圓遊口調のお不笑味の滑稽を一席伺ひまして、少々の間お耳を拜借(では無いお目を拜借)致しますが、恰好春先でございますから其故に梅見の藥罐といふ、桃林先生の頭を見て思ひ着たのではございません、澤山お饒舌を致した跡でございまして、何かお目新い事を口演さうと兼て腦を痛めて居りますが、何うも愚昧の圓遊でして、巧い口調も出ませんが、追々是から一心不亂に勉強いたして考へます、然し乍ら只今では商賣流行でございまして、昔は兩刀たばさんだ方が上で別して町人抔は風上に置く事は成らん抔といふた見識でございましたが、どうも只今では商賣でげして、此商賣も段々練達て來るとお世辭といふ者が其所へ出て參ります、何う商賣は五圓の物を商賣て　甲「箆棒奴一割つきやア利益ねんだ大變安いや買て行ねえ……と、突劍どんに言た日にやア、何だか安い

物を買ても恐ろしい利益られた様でゲス、鳥渡お世辭にも　乙　元が切ますが亦お後もございますから願ひませうといはれますと、大變安く買た様で、家へ歸つて好く見ると五圓で買つたんだが二圓五十錢の價直しつきやア無いといはれ、夫が爲に肺病を引起す人が幾らもございますが、命掛けで二圓五十錢の買物を爲なくつても、宜いんでゲスが、吾々社會は其内にもお世辭が無ければ不可ません、英國や佛蘭西の國の藝人や亞米利加邊の、藝人の樣子を聞きますと大層位置の宜いもんださうでございまして、馬車へ乘つて出這入りを致してゐて、外國の吾々位の者は隨分何うも立派に遣つて居りますが、日本の習慣で落語家は何だか落語家然として、睨みの利ない

樣な鹽梅で演說抔は思いも寄りません、圓遊の顏を見るとイロ〳〵お笑ひが有る樣で、餘程可笑い顏に生し付て來たんでゲスが、外國では黑馬車へ乘て大見織の樣な事で、勿論英國抔では日本で席料が四錢なれば、三圓位取るんだそうでけす、日本も追々然う成るといふと、落語家の圓遊も一手を一人育つて居りますが、何卒圓遊然と爲ない樣に祈つて居ります……此お世辭を言ますが、附燒箇のお世辭を不可ません、人に逢たらお辭義を爲よと、二六時中師匠や何かにいはれて居りますが　甲『エ、、旦那今日は……　旦『今日は……オヤ私は和郎に何處で逢ひましたつけネー　甲『ソラ頃日何でゲシタ……ずツート橋を渡つて來ましてソラ那の角で……』

旦『成程然うだつたけかネー遂忘れました　甲『此りやア恐れ入りましたネー、お宅へ宜しくどうか　旦『誰に……　甲『奥様に宜しく　旦『拙者の家内は六年前に他國へ行きまして未だ居りません

甲『でゲスか……お阿母様に何卒……　旦『阿母は若い時に別れて居りませんよ　甲『こう阿父さんに　旦『親父も死亡なりました、今では私と女中ッ切ですよ　甲『オヤオ！ヤ……お向へ宜しく……　旦『向ふは原だよ　甲『驚きましたなア、お隣家様へ

旦『隣りは兵隊屋敷でなア　甲『ヘエー恐れ入ましたなア路次へ宜しく』路次へなんてへ様では工合が悪うございますが、お世辭がなくつて不可ないといふのは、髪結所でございまして、どうも那の床

屋といふ者は美麗にして、掃除を第一にしてお客の寄る處でございますから、手一杯に不潔でない様にしなければ不可ませんが、隨分無性なのが有ますからな、水何ぞば何時汲だんだか分らん、瓶ん中へ子子が湧てる、這入ると土間が何は刈込だ毛だか知れん奴が充滿まつて、鋏も躰好くずーッと並んではゐるが、何時磨たんだか錆てゐて、其錆は客の頭で落すといふんでゲスから、是を一名無性床といふ評判の髪結所で、近所の者は往きません、知らない者は飛び込みます　客『親分今日は……　亭『お入來被爲まし　客『何卒直ぐ遣れますかなア　亭『私は今心持が惡いから家の奴に……やい何所へ行たんだい、仕方の無へ奴だなア遊んで計りゐやアがつて……

…頃日迄ほうろくの尻許り剃てゐたが、漸く睫も剃た樣だから人間の頭へ掴まらせ樣と思つてゐりやア睡眠り計り爲て其間には遊んでゐやあがる、恰好人間が來たから頭へ掴つて遣つて見ろ　客『親方此小僧さんが爲るんですか……　亭『然う被仰いますが此小僧中々巧うございますよ、此方へ被在て下さい……顏から〳〵』

客『親方どうも濡し水が少しも有ません　亭『此小僧には汲ねへからね、釣瓶が大きくつて……氣の毒だが一杯向ふ裏へ往て汲で來てお呉ん被爲な』ブツ〳〵いひ乍ら向ふ裏へ行て水を吸で參りました　亭『好く濡してね濡しが惡いと痛いよ、上等の髮結所へ參りますと、顏を出して置きやア悉皆剃てくれますが、斯ういふ髮結所では然うは行きませふ、仕方がないから自分で濡し、椅子へ寄掛るなんといふ譯に、不可ません古風に膝を掛て　亭『早く遣れ　小『へえ、ゴツ〳〵〳〵　客『此りやア、大變に痛うございますなア酷くて……　亭『暫時の間だ〳〵よ　客『始めつから逆剃をするのは驚いたねへ　亭『生地の無へ奴だ如斯野郎が剃れないか(コツリ)如斯野郎の面位が剃れねへ奴が有るけへ(コツン)　客『親分然う私の頭をコツ〳〵毆つちやア痛くつて堪らないや……　亭『オヤ、和郎さんの頭かへ、ツイ大きくつて打好かつたもんだからね、此亦五六軒先に評判のお世辭床といふのが有りまして、這入つて來る客を贔の神ごいひ〳〵ニコ〳〵した客を太黑天、一寸苦み走つた人が毘沙門で

肥つた人を布袋和尚といひますが好い面の皮でゲス、色男だの福の神だの大將だの大盡だの或は親玉、親方抔といはれて好い心持だから人が澤山參ります、片ッ方の方ちやア女郎買の惚氣をいつてる、此方に三味線、琴が始まる阿古屋の三曲といふんで、米藏なぞもかなはん位にコロリン、シャン何ぞを遣つてゐる、後ではケロリン、シャント茫然してゐる方もございます　○『イヤ將棋でげすね……』

乙『將棋も詰らねえが、へボの此人を待遇てゐるのさ　甲『看のは（丙に向つていふ）王樣が無いねえ　乙『モウ夙に王樣ア取て仕舞つたのさ、先刻飛車取王手をした時、氣を注なかつたから角で將を取て仕舞ひました　甲『然ういふ將棋は詰りませんねへ、へボ王

棊何ぞは不可から此で以てどうです酒落と行きませう　乙『宜しい一ッ酒落ッ子を遣らう　甲『斯う將棋を拔べた所で歩を突きますねへ　乙『夫でどう酒落るんです　甲『ふ月八日は吉日よ、何ぞはどうです　乙『成程……私がコー歩を突きます　甲『和郎さんのは乙『ふづ……　甲『ふ月八日は不可ませんよ　乙『ふづ……ふづ……ふ月（風月）の饅頭は大變旨うがすなア　甲『酒落ちやアないね、どうでせう角道を突て角道の說法屁一ッ、何は好いねへ』

乙『旨いねえ中々……どうでせう角道を突て、角道が起つて家の女房が倒れた、抔は……　甲『何です夫りやア　乙『血の道が起つたといふ酒落だ　甲『不可ない、一寸飛車を動かして、飛車は飛

車だが藥箱持ぬ何ぞは　乙『どうでせう飛車を動かして、飛車ぢや困つた抔は　甲『面白くないねへ、然ういふ洒落は不可ない　乙『どうでせう一ッ歩を突て、ふ月……　甲『ふ月八日は前に出ました　乙『ふさしの下の首縊り　甲『詰らんねね、此樣子ちや洒落はお止だ……オヤ德さん君は、平生書籍杯を讀だ事も無いのに、今日は感心に書籍を讀でゐるね　德『今日はちやンと學問をしてゐるんだ　甲『ゐらいね　德『ハテ和郎達と違つて駄洒落何ぞをいつてゐないよ、此本を讀でズーッと記憶爲て大しなもんです　甲『何の本だい　德『戰ぐげす、默つて聞て、お在讀で進るから……ダーイコーウ……大閤とか加藤と組打を爲る所なり　甲『戲談いつちやア不可ないよ、夫りやア和郎大閤樣と加藤樣とは主從だせ　德『成程然うか……能く考へて見たら、戰が暇だから戰の稽古をしてゐる所なり　甲『戲談いつちやア不可ない、嘘計り讀でゐる　德『おやア間柄十郎左衛門の働きを讀で遣らう、間柄十郎左衛門は一尺二寸の大太刀を振上げ　甲『一尺二寸の大太刀は可笑いねへ、一尺二寸せえと是つ計りだせ　德『一尺二寸は横巾なり　甲『然んな大きなのが有る物か縦は……　德『縦の長さは數が知れざるなり」

甲『ハ、、馬鹿な事をいふ男だ、其刀を振上げたら和郎向ふが見えなからう　德『見えない時は窓を開く可し』と書て有るよ　甲『窓何ぞを開た日にやア、鐵砲め丸や何か飛で來るだらう　德『然うい

ふ時は金網を張る可しと、但書が附てゐる　甲『然んな刀が有るもんか、馬鹿にしてゐやアがる……親分未だ私の番には廻りませんか　亭『和郎さんは先今月の月末に成りませうなア　甲『戯談ぢやアないせ、モウ今日で三週間に成るよ、ヲヤ〳〵噂が涙垂して來た　女『モシ良人さん、何日髪結所へお在被爲たんです、もう今日で二十一日に成るぢやア有りませんか、未だ和郎さん髪結所に待つてお出なさるんですか　亭『お内儀さん、決して旦那は女郎買や藝者買をしてゐる譯では有りません、全く私共の見世が立込ましたので　女『モウ近所から毎日見舞に來て被下て命が有れば好いがつて　亭『マ、命が有るから御心配無く　甲『直にモウ歸るから安心して留守を氣を注て待てゐな』といはれて女房は立歸りました

甲『ネー八さん、此所で以て詰らぬ話しをしてゐるのも可笑く無ねが、鳥渡臥龍梅が大層好くつて、向島の花屋敷が宜いさうだが、是から一ッ和郎と乃公と此所ん所を中座をして、竹屋の渡船を向ふ越にして中の植半か何かで一杯飲つて御膳を食て、梅見といふ寸法はどうです、此所で癖論を立て無益ん話しをしてゐるのも、面白く無へから兩人揃つて中座を……と源さんと八さんが髪結所の奥座敷で相談が出來ゑして出掛け、竹屋の渡舟を渡らうといふんで、今船へ乘込と十八位の人柄なお嬢樣でございます、中肉中背ポチャ愛嬌といふ、鳥渡色が淺黑い所へ白ノッと白粉が付てゐる、隨分色が

黒くて白粉の乗んのが有ます、然ういふのは煉瓦同様でセメントで積揚る、島田は文金の高島田といふ程でもなく、人柄なお頭でございます、髪の解れ毛が顔へ二三本垂て、此髪の毛が顔へ鳥渡懸つたてへ者は、愛嬌の有るものでげす勿論頭日他家のお娘子が　娘「髪の毛の顔へ掛つたてへ者は愛嬌の有るもんですわつて、顔へ一杯毛を下て向ふが見えなくつて、道普請へ轉り込で大變な怪我をした者が有ます、お召物は京縮緬の三枚重ね、西陣で四百五十五圓五十錢で買つた、金ピカの高尚の帶を締め女中を一人連て、お女中は結城紬のお召に黒繻子の帶を締め一所の船へ乗込だが此方は八さん源さんモー何家で遣つたと見えて一杯機嫌　源「ネトオイ八さん　八「エ

、　源「和郎と乃公と斯うして竹屋を渡つて、見から向ふへ往て土手を運動といふんで、須崎村寺島村をブラックといふのは、鳥渡好いねえ、梅見は又秋の枯野とは氣か變つて好い心持だ、大層今日は海軍のお催しして、千島へお渡海の方を送るとかいふんで隅田川が賑かだなア……鳥渡向ふに居る新造は好い新造ぢやア無いか、私はもう一遍那の位の新造を女房に持度いよ　八「だつて和郎幾歳に成るへ　源「僕は病の爲に斯う頭が禿ちまつたが、割合に年齢は未だ若いよ　八「何歳だへ　源「四十三歳二ヶ月さ　八「餘り若かア無い　源「然し心有る婦人は僕位の年齢格好を好きますねへシロ〳〵向ふでも覗てゐるよ……お嬢さんエへ、、、渡しをお渡りに成り

まして、何方へお越に成ます　女『お嬢様はお別荘へお出に成ます
源『アア左様でございますか……お人柄なお嬢様でげすなア、是
で以て糸針は勿論茶の湯活花から弓馬槍劔の道迄、お心得でまで以
て學問が有つて活潑で、男や何かと口を利く所がコウ西洋風で、誠
にモーお嬢様私女の心緻縹は福助然とした所が有つて、米藏にも似
てゐて榮三郎の御様子が有つて、お美うどざいますなア　娘』と
ういたしまして、妾共は然んなお目の留る様な女ではどざいませ
んと、女中兩人は唯顔を眞赤にして差俯向てゐる、兩人は頻りに顔
を突合して賞てゐると、女の方でもジロ〳〵見て居りますから、
兩『何だか容子が變だ』と思つてゐる内に船は向ふへ着くと、一同

上陸つて娘の連中は三圍の土手を下りて行く、此方は今こと〻ひの
所迄來ると跡から今の娘の供をして來た女中が　女『もし旦那様鳥
渡お待被爲て　源『ヘエ何でげすか何か御用でげすか……』
女『誠にお氣の毒様でございますが貴郎に少々　八『兩人の内の何
方に　女『貴郎に……　源『私でげせう四十三歳二ケ月……此
方ぢやア有ますまい　女『ハイ貴郎に……唯今のは妾の主人でご
ざいますが、今鳥渡三圍の茶見世に待て居りますんでございますが
貴郎に是非一ッお願ひ申したいんで出ましてございますが　源『へ
有難う存じます、私は年齢を取てゐる樣でげすが、から若いんで人
間も中々役に立ちます……、へえ……品に寄れば隨分御養子に

往つても宜い位なもんで、西洋の踊でも何でも心得て居ります、へエー直ぐ昇ります　八『勝手に往きねえ、乃公を一人殘して行きねえな、梅見に行うといふんで乃公を此所迄連て來て置て、和郎は勝手に女の處へ行きねねな、人面白くも無へ　源『乃公が女に見初られたつて、然う怒らなくつたつて宜いぢやア無へか、一所に交際ねえな其代り頃日貸た五圓の證書な、那れを此所に持てゐるから和郎に遣つちまはア　八『ぢやア此證書をくれるのか有難へや　源『乃公だつて夫丈の目的を付て來たんだ　八『默てねえ　源『サ隨行ねゑ〳〵　八『往つて遣らう……けれども和郎が、でれ〳〵してゐる處へ往ても詰らねゑからなア、まア行う、源『お女中私で宜けりやア直ぐ參ります　女『ハイ……貴郎も御一所に　八『行ませう

此男は幸福者だ星が宜いんだネー　女『お孃さんお出被爲ました』娘『然う、和女那の方に賴んでお臭れな　女『ハナ……アノ、誠に恐れ入りましたがお孃さんがお癪を起して被在て、一遍お癪が起ると直き跡が差込で參る性質で、癪の藥には銅を舐ますと癪が直に沈靜んでございますが、此邊にはトンド銅がございませんで困じてゐる所へ、恰度お船で和郎の頭を拜見いたしたのを思ひ出しまして……貴郎のお頭はアノ藥鑵の樣な鹽梅式で、其お頭を舐めましたら、銅同樣の利益が有らうかと、斯う存じて願ひに出ましたんでございますが、お頭を舐めさして戴き度う存じますが、如何でご

ざいませう人助けに成ますが　源『エ、私の頭を甜度いといふんで呼んだんでげすかへ　八『オイ乃公が思はない事ぢやア無いや、和郎の面アどう見ても情夫に成る面ぢやア無いんだ、お嬢さんが呼ぶてえのが變だと思つた　源『アヽー落膽した、和郎に遣つた五圓の證人を返してお呉れ　八『戯談いつちやア不可ねえモー中懐中へ入て出しやすしない　源『飛だ目に逢た……ぢやア頭が舐度いといふ丈で、外に話は無いんでげすかい　女『ハイ貴郎のお頭さへ舐めさして戴けば宜いので　源『ぢやアお舐被爲、不可んといつても義務が欠ますから、私の頭で宜きやアお舐被爲まし、澤山お舐なさい　娘『ぢやア御免を蒙ります、少々何卒……　八『其男は大層頭が

美味いといふ評判ですから、澤山お舐なさいよ　源『馬鹿アいふない　娘『夫では』といふんでべろ〳〵〳〵、心持の惡いの何のといつて、餘程心持が惡い　八『ヤヽ、モット澤山舐てお遣ん被爲　源『餘計な事をいふなつてば、娘は男へ摑まつてべろ〳〵〳〵と一生懸命、舐てゐる内に差込が來たと見えて、源さんの頭へ嚙付ました　源『アヽ痛タヽヽ、此りやア驚いた……此りやア恐れ入たねへ、舐るのはお許し申ますが嚙付れては困りますなア　女『誠にお氣の毒樣で、お嬢樣がお差込が來たと見えて、遂苦し紛れにお食付被爲たんでございませうが、何所か疵が付やアしませんか　源『ナニ疵は付きましても漏はいたしませんでございます』

粗忽の使者

エ、今日は圓遊のガラに在りません、極粗忽のお話でございまして粗忽の使者といふお笑話を一席辨じ上げます、牛込に粗忽長屋といふのが有まして、此長屋にゐる人は殘らずお差配からして、粗々ッかしいお方がゐるんでけして、また粗々ッかしい人でなければ長屋を貸さんといふ位の、差配人さんの心持といふんで、夜が明けると長屋中殘らず間違た話ばかり　●『さア此の惡魔ア只ア置ねへ、さア此惡魔ア本當にどうするか見やアがれ、人を馬鹿にしてやアがつ

でやヤがつて、ヤイ　△『オイ〳〵お前何んだつて夫婦喧嘩をするんだなア、止しねえナ、見つ共ねへぢやアねえか、本當にどういふ理由なんだ　●『ナニ夫婦喧嘩をしやアしめへしナニ差配人さん、狗が馬の糞を放れやアがつて、夫から吾哥が憤つたんで　△『ハー然かハ　●『今此奴を叩ッ殺して熊膽を取らうと思つてるんで』

△『ヘエ、夫は違ふ、熊の膽を取るには大方鹿の方が宜からう』なんてんで皆間違つてゐます、隣の家はお職人で　▲『サア〳〵仕事から歸つて來たから、家の坊やを湯に連れて行くから支度をするが宜い　女『お前さん其所に居らアネ　▲『ム、茲にゐたか、餘り鼻ッ先にゐたんで見損なつて仕舞つた、太層頭へ手習をしやアがつ

たなア、何だつてそんなに面へ墨を塗つて來たんだ　女『お前さん何を猫にいつてゐるんです　▲『然うかえ、サア湯に行くんだから おぶッされ〳〵……や、どつこいしよ、ヂャンと背中へ捕まれ、オヤ大層お前は重く成た　女『お前さん柱と背負つてるんです』

▲『柱か、道理で恐ろしく重たいと思つた、ドッコイショ　甲『阿父ヂョ〳〵が脱けた　▲『ナニ鰌が食ひてへ　子『ヂャ〳〵（草履）が脱けたんだてえば　▲『ナニ草履が、然う〳〵俺は粗々かしいから間違へて仕舞つた、宜いかへ、そらどつこいしよ、ア痛え頭を打附けて　子『痛からう、當つて　△『當たつて俺の頭だから餘計に利いたと思ふ……ハイ御免なさい、もし親方　亭『モシ親方、貴

公は宅へお入來なすつて鳥目を置かず、此方の錢を掴んで行つては困ります　△『失禮いたしました、ツイ置くのを忘れまして……チョイ〳〵此方へ仕舞ひましたので　亭『困りますなア　△『ナニ惡い料見では有りません　亭『餘り善くもない』裸体に成て『はい御免なさい〳〵、本當に悴は大きく成つたなア　男『何んだつて俺の背中を洗ふんだ　△『是は恐入りました、ツイ悴とお前さんと間違ひまして、是は恐ろしくヌルイなア……ア、此所は水槽で、恐入りました、私は誠に粗々ッかしくつて仕様がありません、斯いふ時にや早く歸りませう、歸りに他家の小供を背負て來て　△『エー今歸つたよ　女『お宅はお隣家なんで　△『是は恐入りました、我

家をガラッと開けて　△『唯今は失禮をいたしました』然ういふ人が集りますと始末に往けません、然うかと思ひますと、元祿の昔武林唯七といふ人は、淺野内匠頭さまお氣に入りの御家來でございましたが、粗々かしい事に於ては隨分馬鹿造といつても宜い位のもので、或日殿様が室の梅を大變に寵愛で御自慢でございまして、早咲を御賞美なすつて　殿『これ〳〵武林〳〵』　唯『へえ』　殿『今日は予が自慢の紅梅を此所へ飾つたんだが、餘程どうも梅は香ひ、櫻は花よ、と申して實に宜い薫りだから嗅け』　唯『へえ、誠にどうも私には少しも香ひませんです』　殿『貴樣は風邪でも引いたか』　唯『風邪の氣味はございませんが、少しも香ひません、スーハ〳〵、無暗

に嗅いでブツリ只一輪の花を取つて仕舞ひました　唯『是は頓でもない事を……』　殿『予が秘藏の花を何んだつて其方は落したんだ手討にいたして仕舞ふ』　唯『これは恐入ります、と頻りに植木鉢の前に兩手を突てお辭義をしてゐます』　殿『此所へ出ろ、お側へ行つて武林殿』『グー』と眠てしまいましたが、恐ろしい膽の据つた人が有つたもので、然ういふ人物には隨分お話らしい事が幾らも有ります、是は或る大名のお家來でございまして、松平家を名告つてゐる、立派な柾目正さまといふ殿樣の御家來で、地蓋治部九郎さんといふお方がございました、此の仁の粗忽の事は餘程粗々かしい男でございますが、殿樣には大變にお氣に入りで、或日の事、丸の内に

赤井御門守様へ御使者の役で參りました、此の赤井御門守さまの御高は十二萬三千四百五十六石七斗八升九合、一摑み半分三粒といふお高でございます、成丈お名前はお差しに成らんやうにやつて置く積りでございます　治『勿論お醫者がお引合に出ると、甘井羊羹さん、三角銀杏さん、横濱交易さんなんといふ、餘り世間にないやうなお名前で、お勇み衆は、源次、ガラッ八、腦天熊、オアイダの文吉、二分五厘の吉、之は五粉屋の娘を半分口説き落したから、二分五厘の吉さんといふので餘り無い名で、さて今チャントお共揃いで使者のお役は地蓋治郎、七郎、五千石の格式で　○『今日はお使者のお役御苦勞千萬にございます　治『いや主用なれば恩に係る所もなく、

之から行て參ります、コレ〳〵供揃いは出來て居るか　○『殘らず揃つてゐます　治『これ〳〵辨當〳〵……辨當ぢやアない馬丁、何にをソレ犬ぢやアない、あの馬ア曳け　○『へえ……之へ參りました　治『よし、ちやんと上へ乘かると馬の頭を後ろの方にして治『これ〳〵馬丁　○『ハー　治『此の馬は何故手綱を付けて置かん　○『夫では逆さまにお乘り遊ばしたので　治『ウーウ、成程之れは大きに困る、斯う乘つた儘でグルッと廻はして貰ふ譯にはいかんか　○『然うは參りませんからお乘換を願ひます　治『誠に不自由の馬だ、兩方に頭を付けて置けば宜いのに　○『恐入ります、そんな馬は有りません　治『兩方に頭の有る馬は漢土に在るさうだ、

夫を持て來ないのは不都合である　○然ういふ譯には參りません　治『ドッコイショ、之れで宜しでげす、どうかお乘換を願ひます　供揃ひは宜しいか　○『宜しうござる、之より五千石の格式で、治部九郎殿は、上下を着してお馬に召し、兩徒士に草履取、合羽駕籠、紺看板に梵天帶、リユッとした打扮へて　○『ハーヽヽ』と丸の内の赤井御門守樣の御門前まで參りました　●『松平柾目　正樣よりお使者ア、御門が八文字にギイート開きました、大抵御門はギイーと開きますが、落語家の家の御門抔はギイーとはいひません、ガタン、ピンガタンといふは圓遊の御門です、お大名の御門はさうでもありません、少しも金錢に糸目を付けずに拵へた赤門でございまして、左右に開きますと正面の紹色緣サヤ形のお唐紙にして、使者のお役は只今ならば辨理公使とか、全權公使とでもいふお役で、案内が同道して使者の間へズイと通りました、お出迎ひに出ました者は當家の重役で、黑羽二重の紋付に麻の上下を着けて夫へズイと出ました　○『エーー今日は遠路の處お使者のお役、御苦勞千萬にございます、手前は當家の家來田中三太夫と申ます、お見知り居かれまして御別懇に願ひます　治『はい、手前は松下柾目正が家來で地蓋治部九郎と申ものでで、至て粗忽者でございます、已後お見知り置かれ御別懇に願ひます　三『どうか何分共に手前も願ひます、さてお使者の御口上を手前迄へ願ひ度事で　治『手前は赤井御門守……

……いや夫は御當家のお名前、手前は田中三太夫……これは貴公様の御姓名、手前は松平柾目正の家來でございまして、地蓋治部九郎と申至て粗忽の者　三『夫は只今伺いました、お使者の御口上を

治『エー誠にどうも今日は、エー思ひの他快晴いたしてござるヲ』

三『左様でございます　治『エー手前は松平柾目正が家來』

三『貴公様は地蓋治部九郎さまと被仰るお方で　治『左様でござる

全く治部九郎でございますから已後お見知り置かれて御別懇に願ひます　三『手前も宜しう願いますと事でげして　治『エー誠にどうも

貴公、恐入つたる儀ではございますが、エー誠にどうも、手前はソノ物を忘れるのが一つの持病でございましてナ、使者の口上をガラ

リ失念をいたしましたんでござるが、眞に何ん共どうもエ、申さうやうもない儀でございますが、どうか武士は相身互ひでござるからどうかお考へ下さる譯には往きませんか、手前の口上を　三『ハー

是はどうも恐入りましたなア　治『エー何にか貴公様の御主人と手前の主人と何にかお引合つたやうな事を、お聞きなすつた事は在ませんかなア　三『一向にお使者の話もございませんでしたが、どういふ御用事なんですか、お思ひ出しはなか〳〵付きませんかなア』

治『ガラリ失念して更に浮んで參りません、眞に情けない譯で、手前はこれどうもお使者に參つて、此の事を申上げられませんやうな事に成ますと、手前切腹をいたさんければならん事でございますが

どうか神信心でもいたし度心持も有ますが、眞に不信心でございまして、苦しい時の神頼みはいかんと思ひますが、何分思ひ出しませんでございます　三「夫は頓でもない事で、手前は尙お使者の御口上抔は少しも心得んで　治「貴公の心得のないのは抔無理は有ません、手前でさへ知らないんですから、左樣なら手前折入つてお願みがございますが、お肯き下さる譯には參りませんか　三「手前身に相叶いました事なればどの樣な忠義でも盡します事で　治「いや眞に其お言葉を下し置かれ有難うございます、實は手前幼少の折柄より粗忽の病氣がございましてナ、其時には兩親が手前の尻を捻りくれます、其度に忘れる事を思ひ出した事もございますが、眞に何ん

共相濟まん儀でございますが、抔當家に指の頭に力のあるお方はございませんか、在つしやるなら手前の尻を二タ捻りばかり捻つて下さる譯には參りませんか　三「へゑー、貴公の尻を捻りますと、忘れた事を思ひ出すのが貴公の幼少の内からの習慣しでございますか　治「左樣でございます、尻が岩のやうに成て居りますから、チヨイ〳〵捻りましたんでは容易な事ではいけません、願くはお力のあるお方を抔家來の内からお選り出しを願ひ度ものでで　三「どういふやうに成つて居ますか、チヨックラお示し下さるやうに　治「始めてお目に懸りまして、お尻を御覽に入れますのは面目次第もございませんが、人を助ける思召でちよいと御覽に入れます　三「手前も拜

見いたして置きませんと、何の位のお尻だか分りません、といひ付けゐ者でも困りますが、チロッと拜見を……　治「只今袴を取りませう、肩衣抔を着てゐるから餘程手數か係ります、宅にゐると若流してござるからグルリと捲れますが……此の通りの譯でチョッとは覽なすつて　三「どうも是は餘程念の入た尻でございますなア、大層肉が堅まつて瘤がついて居ますなア　治「最うチョイ〳〵捻りますので鎧の如くに成て居ります、いざ戰場といふ場合にもお尻丈は鎧なしで勝まるだらうと思て此所丈は自慢でゐます　三「餘程お美事なものでございますなア、手前少々お捻り申ませう、隨分手前も指には力がございます　治「貴公樣がお捻り下されば何共有

難い儀でございますが、然らば少々願ひ度ものでいます、やつて見ませう、ま斯いふ鹽梅しきにソーウ……隨分強い積でございますが、如何でげす、お思ひ出しでげすか　三「一向に通じませんで、何所へ捕まつて在つしやるんですか夫も分らん位で　三「ハー、之は餘程のもんですなア、精一杯力を入れてやりましたが、何所へ捕まつてるんだか、何んだかお通じがありませんか」　治「少しも身体に利きませんが、誰方かもそつと強いお方を願ひ度ものでございます　三「宜しうございます、唯今同役と能く此の事を打合せをいたしまして申上げますから少々お控へを願ひます」　治「何分どうか宜しく願ひます、三太夫は驚きまして次の間へ下が

つて、同役松木脂十郎、石垣蟹太夫抔殘らず集めまして　三『同役どうしたものだらう　脂『今何にか聞くとお使者がいふ事を忘れるとは實に情けない譯で、夫をお上へ申上げれば治部九郎さんは切腹をしなければならん、武士は相見互、我々だつて隨分忘れる事がないとはいへない　蟹『俳し使者の口上を忘れるなんてえのは實に馬鹿氣てゐる　脂『お前だつて新宿の娼妓の所から吾儕の所へ傳言のあつたのを忘れたぢやアないか　蟹『娼妓の事と使者の役と一所にはならねゑ、お前もちよイ〳〵忘しるせ、八百膳へ一盃飲みに行た制前を未だに忘れてゐるだらう　脂『頓だ所で催促をするコレ〳〵職人貴樣は作事に參てゐるものが、何んだつて此所へ這入て來た、

工『へえ、ば免なせへ、小哥アなんです、大工の長八の所から參つて居ります職人ですが、お椽側先ゞ損じてゐる所を手入れをしてゐましたが、へえ〳〵　三『何にを笑つてゐる、ど何うしたんだ　工『どうしたつて……ナニを、好いてゐ事よ、何にを笑つてやアがるんだ　○『ちよッと來てくれ　工『友達が呼んでゐますから』　三『案内なしにズカ〳〵這入つて來ては困る　工『チョッと申上げ度事があるんでエへ〳〵……何んだよ、聞きア使者が口上を忘れて尻を捻ると思ひ出すてへから、一番俺が使者の尻を捻つてやらうと思ふんだ、此方は道具があらア、釘拔でグーイとやつたら、思ひ出すだらうと思ふ、どんな岩ア見たやうな尻だつて大丈夫だ、抔樂

つて置けば腹を切るでゐんだ、人間一人助げるんだから宜いぢやア
ないか　○『旨く往くか　工『篦棒めえ、今腹ア切るでえ最中だ、
搗アものか　○『失策るな　工『大丈夫だ、シトツケ恐縮〳〵い
ふナ、大工は流々仕揚を覽じろ、默つてろ、情婦が付いてらア』
○『情婦が捻るのとは違はア　三『何にを其所でぐず〳〵喧嘩をし
てゐる　工『友達が異見しましたんでげす、ま、ほ免なせへ、實は
今お庭前でちよイと承はつたが、ソノなんですね、お使者が柾目
正さまから入來に成て、口上を忘れたてえいば余り馬鹿氣た話で
大笑ひをしたンでげすが、小哥が一番使者の尻を捻らうと思ふと友
達が止せッてえが、止すといふ仕事はねえから、捻つてやらうと思

ふが三太夫さん、小哥に捻らしてお呉んなせえナ　三『あれを聞い
たか　工『殘らず聞いた　三『仕方がない、聞いたなら話をするが
當家から指に力のある者を出してくれえいとふ、强ての賴み實に大
變な尻だぞ　工『どんな夫りや石を見たやうな尻だつても搗アも事は
ないから、やつちめえます　三『やるてえ位ではいかんよ　工『心
得てます、小哥ア小兒の中から捻るのに妙を得てます、仕事は旨く
アねえが、捻る方では腕が鳴つてゐますンです　三『旨いナ、全く
上手か　工『なんなら捻らして御覽んなさい　三『全く指に力があ
れば捻らんでも宜しいが、同役どういたしませう、貴樣は何んてえ
名だ　工『留ッ子てゐんで　三『留ッ子といふ名はなからう、留次

郎とか留造、留吉とかヤすのであらう　留「其留吉で　三「貴様の苗字は何んといふのだ　留「小哥ア明神下ぢやアない、立大工町で苗字は知りませんね　三「不都合だナ、留ッ子殿は可笑しい」

留「職人は殺伐の者だから其位のものでございませう、が留之進として當家の家來筋に仕立て出したら、先方も困つてゐる處だから宜しうございませう　三「左様なら、貴様今日は留之進と成るのだよ少しの間　留「之はどうも恐入りました　三「先方は大家のお使者だから失禮が在てはならんよ　留「宜しい、小哥は彼處で　三「吾儕が彼所で留之進殿といつたら、ハーといふんだぞ　留「ハー、といふのは六ケ敷いね　三「萬事物の頭へ「オ」の字を付けて、言葉尻に

奉るを付けて丁寧に宜いか　留「何にもグズ〳〵いはず、チョイト行つてチョイと捻つちまいませう　三「然うはいかん、丁寧にいはんければならんよ、何んでも口を利く端に「オ」の字を付けるのだ　留「之は驚いちまふネ、夫は拔きにして直にグイと捻ちまふ譯には行きませんか　三「少し丁寧に口を利かなければならんよ　留「ねヽやつヽけませう、物の頭に「オ」の字を付けて言葉尻に奉るといふのでございませう　三「夫は宜いが、大紋附は困りましたナ、どういたしませう、貴公の上下を貸してお遣りなさい　蟹「手前の上下があるから着換る　留「其奴ア有難い、之ぢやア出られない腐つた半纏ぢやア　三「股引を取つて襦袢を着ろ　留「恐入りますね

之は黑い着物ですネ、成程紋が付いてゐる、方々に……　三「之は五ツ紋といつて屋敷では然ういふ紋を附けるんだ、　留「始めて着たが、劇場で能く殿様が斯いふ着物を着て出て來る、小哥にお呉んなさい　三「慾張るナ　留「之は帶ですか、帶をゞめた事がねえから締めて下さいナ　三「困つた奴だナ、仕方がないどうも……甘くやつてくれ、袴より先に肩を附けるんだ　留「之は驚きましたナ斯うやるんですか、之を斯うやつて挾むんですか、六ケ敷いね、お笑ひなさるナ後生だから　三「ぐす〳〵いふナ、直ぐに袴を穿くんだ　留「斯いふ鹽梅に……可笑いね……可んでせう前に板が來たが　三「夫は腰板と申して後ろに參るのだ　留「夾囊の棚かと思つた　三「夾囊の棚ては奴があるものか、其儘廻はしてもいかんよ廻はしたつて廻はらんから穿き直さんではいかん　留「手數が係るネ、片ツ方に穴が明いてるか、之は小便をする穴かへ……両方の足を入れるのかへ、成程究屈袋とは甘くいひましたナ、ひどいもんで汗をかいて仕舞つた　三「奈是後の柱を一所に結ひて仕舞つたんだ　留「道理で變だと思ひました　三「サ、其所に座つてゐろ　留「之は驚きましたナ　三「頭髮が少しまづい、チョン髷でハケ先をばらり〳〵散かつてゐてはいかんね、水を附けてこけ　留「成程眞直に成た、之でお武家さまと見へますか　三「なか〳〵以て品格が宜い、役人のやうだ　留「戯談いつてゐる　三「甘くやれば褒美を

やるぞ、無暗に言葉を丁寧にして失禮のないやうにするのだよ、吾儕が留之進とやしたら出て來い』　留『大丈夫で、コレは恐しくゴソ〳〵するヤ、丸で久米の平内樣見たやうで　三『默つてゐろ、大工の留つ子を留之進と仕立て麻上下で立派なお武家が一人出來ました　三太夫さんは一足先へ襖をがらり　三『嘸かしお待遠さま　治『之は〳〵誠にどうもお手數を掛けて、何共相濟みません儀で、如何でございます、御當家に指の强い方はございましたか　三『ハア、一人家中の内から留之進と申者がございます、之は誠に力のあるもので、一人召連れましたから宜しく　治『之は有難い事で、何んともどうも……早速お招きを願ひます　三『ハア……コレ留之進殿

〳〵……留之進殿、どういたした　治『未だお出はありませんか　三『留之進殿……これ〳〵其處にゐるぢやアないか、奈是遲辭をしない　留『オ、然う〳〵驚いたね、此奴ァ留之進殿てゐものだからッイ氣が附かなかつた　三『いかんせ、そんな工合で宜いか』　留『留ッ子といはねえから、小哥ぢやアねへと思つた　三『貴樣を呼んでゐるのだ……此者を留之進を申ます　治『之は何共どうもどうか此方へお進みを願ひます　留『三太夫さん、後をピッタリ閉て下さい、見ちやア往けませんよ　三『然らば此者を之へ置きますから宜しくどうか願ひます　留『後を確かり閉て下さい……ね、能こそ、え〻お使者樣の何んでございませう、え〻た口上をお忘れ

奉りましたんでげせう、夫でえ、私樣がね、指の用を仰せ付けられ奉りまして、乃で此所へお出奉りませんでげす　治『ハア、誠にどうも貴公樣が留之進樣といふお方で、何分共ゝお捻りを願ひます　留『えゝ夫りや何んです、お承知奉つてゐるんですが　治『どうか宜しう願ひます　留『宜うがアす、さアお尻樣を此方へどうか、お出し奉るやうに其處をお賴み奉りますんで　治『左樣でございますか、失禮ではございますが、ぢ寛に入れます……へゐ斯樣な譯でございます　留『成程此奴ア余程何んですナ、お固まり奉りましたナ、お蛸が余程どうもお寄り奉りましたンですから、此奴ア余程のお尻樣ですナ　治『何卒お早く願ひ度ものでゝ

時間の障りに相成ますから　留『宜しうげす、ムゝ、どうでげす此位の鹽梅では如何でござる』爪を立つてギユーと捻る　治『一向に通じません、失禮ながらそんな事位では通じません　留『此方を向いちやア往けないよ、懷から釘打をゾーと取出し四邊をキヨロ〳〵見廻し　留『方々見たつてお前さんを打つ譯ぢやアありませんよ』治『私は何の樣な事に成りましてもギユーと心に通じますやうに成りますれば少々位は打たれても宜しうございます　留『直きにお捻り奉ります、隨分お痛く奉りますからお驚き奉つては往けません、ど何うでござる此位の痛さは、どうでござる　治『成程之は……少々……之は少々感じますナ　留『少し利きましたかね』

治『チイッと利かんから、もそつとお強く　留『もそつとお強く……

……そんならどうでござる、これならばエンヤラヤーノエー』

治『ア痛タ、、、、ア痛タ、、、、思ひ出しました〳〵、思ひ出した

といふ聲を聞いて三太夫さんが、襖をがらりと開け、夫へ出まして

三『お使者の仰口上は　治『能く考へて見ましたら、屋敷を出る折

聞かずに參じましてございます』

貂

エ、貂といふお話しを一席伺ひますが　甲『エ、先生今ははようも

……　主『ヤア誰かと思つたら、長屋にゐる八さん久しく來なかつたねへ……　八『どうも御無沙汰をいたしました、エ、早速伺ひますがね、昨夜まア友達が大勢來て色々話しの序でに、貴郎の處の商賣が誰にも分らねえてんで、今日まア伺ひに來たんですが、全体貴郎ん所の商賣は何だね　主『這入ッて來ると早速私の家業を聞くてえのは面白いなア、私はね和郎の鳥渡知らない商賣をしてゐるんだよ　八『、エー知れない商賣つて、泥棒をしてゐるんでげすかへ……えへ〳〵　主『然んな事ちやア無い私は其俳諧をしてゐるんだよ……　八『灰買ですか、好い天氣にやア彼奴ア宜うがすが、風ッ吹には目口へ這入りやアがつて、其節は上に玻璃坏を蓋にして有るか

ら、大きに宜うがすね　主「否さ私は五文字七文字五文字、三十一文字の句を吟りまして、其處で今日を送つてゐるのさ　八「夫やアお氣の毒ですねー、味噌を一嘗々て勞苦をして今日を送りてゐるんでげすか　主「分らないなア私は宗匠といふんで、發句お素人方が拵へて持て來る、夫を私が拔きましたり天地人を付る樣な譯で、其所で以て私は夫を商賣にしてゐるんだ、五文字七文字五文字といふんで、初雪やなんてゐのは鳥渡和郎方の知つてる句だね　八「今年は雪が多がすから昨年より作物が好く出來るそうで、ま今年は安心でげすよ　主「初雪や二の字〳〵の下駄の跡抔ぞは好い句だな」　八「成程然んな事をいふんでげすか……どうでげしやう初雪やて

んで　主「和郎も感心だね、人は見縣に由らんものだ、初雪や跡は……　八「初雪や一の字〳〵一本齒の足駄の跡なんてえのは不可ませんか　主「長いネー……五文字七文字五文字に成らんければ不可ん、初雪や坊主轉んで毛毬かな　八「坊主が轉んで毛毬……成程此奴ア甘へねえ、どうでせう、初雪や大坊主小坊主轉んで頭の足跡は備かな　主「可笑いなア……ま然し然んなもんだな、初雪や那れも人の子樽拾ひなんてえのは、好い句だなア　八「成程へヱー……どうでせう、初雪や那れも人の親人力車　主「然ういふ心持ちやア出來るねね、初雪や狗の足跡梅の花　八「どういふ心持んでげす　主「雪の中を狗が歩く、其足跡が梅の花の樣だといふ

味噌、犬去つて梅花を書き鶏去つて紅葉を殘す、といふ樣な理由で然ういふ處を鳥渡詠つたもんだなア……　八『へゐ―成程、初雪や方々の犬が白く成る、斯ういふのはどうでせう、初雪や是が鹽なら金もふけ、初雲や是が夏なら金もうけ……　主『然た句だが鳥渡心持が好ゝなア　八『どうでせう、枝々にてんで……』

主『重ね言葉なんて物は中々六ケ敷もんだが　どういふんだへ』

八『枝々に烏止つて雪積り鷺かと思ひゐたりしに、飛ぶ所見たら元の烏なりけり山櫻かな銀杏の樹　主『長いなア其心持は……

八『雪が降てる枝へ烏が止つたら烏も白く成つちまつて、鷺かと思つてゐると飛ぶ所を見ると矢張烏なんでげす　主『成程……山櫻

かな銀杏の樹てゐのは　八『此りやア其お負で、烏が止つてゐる樹一本ちやア引立ねえから、櫻や銀杏の樹もあつたらうと思ふんで……

主『可笑いネー……然しまた然ういふ風に行くんだな……

ヲヤ誰方かお入來だ、サ皆さん此方へ……此りやア、お入來被爲ましし、烏渡八さん其方へ往てゝお呉れ、日外のば出來ましたかな』

甲『四ツ足のお塲を戴きまして、纏りませんが先生に、烏渡一ツ御覽の程を願ひますんで　主『ドレ拜見を……小鼠があざぎに噛る神戸棚度重なりて猫に捕られな、成程此りやア能く出來ましたが、少と之は天には成りませんなア　乙『墨者のは……　主『貴樣のを……ポンゝが痛いと嘘を月の夜に

鼓の稽古休む小理……能く出來ましたなア、少と天には成兼ます

丙『先生私のは……　主『獵人が鐵砲置て月を見ん今宵は確とくまも無ければ……能うがすなア、惜い事に天にはなりません』

丙『左樣でございますか　丁『先生私のを一ッ　主『へゐ……

猫の子を權衡に掛て貰ひしが朝と晝とは夕の違ふなり、能く出來ましたが少と天には相成り兼ます　丁『左樣ですか　△『是を一ッ御覽被爲て……　主『ハイ、飼ふ人の恩を脊に思ふ迄能く嚙分て門守れ狗……能うございますが少と天には成りませんなア　八『モシ御隱居、初雪や　主『八さん何だへ　八『初雪や三尺計りの大貂此行末は何と成るらん　主『ハ、ア之句計りは貂に成る』

果報の遊客

エ、相變らず滑稽を一席お邪魔をいたします事で、何時も花柳社會のお噂がどうも澤山でございます樣な譯でげして、人間も學問を遊ばしてお氣のお勞れと成りました時抔は、少し宛は婦人でも殿方でも御保養といふ者がなければ、中々御勉強の出來るものではない、其所で土曜日曜といふものがあつて、御愉快のお日取が極つて居りますといふ寸法でげして、當節は大分芝居が流行でございまして、劇場へ入つしやると隨分立派なお方が見物がありまして、演劇へ

お出でに成りましても一杯の入といふ、不景氣だなんといひますが然ういふ事は少しもない樣に思はれますんで、誠にどうも當節は景氣も能く、市中の賑ひといふ者は實に西洋人も皆驚いてゐる樣な譯でげして、鳥渡劇場を見覽遊ばすにも、嬢さん方の見る所とお年齢を召たお方が、見覽遊ばす處と吾々社會の見る所と、旦那方の見る所とは見當が違ひます、嬢樣方は幕の間には簪差屋へでも往つて、役者の紋付の鳥渡根掛を買ふとか、袢襟を買ふとかいふ樣な樂みがありまして、幕が明くと見贔負の役者が舞臺へ出るといふんで、どうも若い時のお心持といふ者は誠に御陽氣なもんで　娘『アラ新藏が出ましたよ、那者が腹を切るのは憫然ぢやありませんか、向ふにゐる嫌な役者が腹を切ちまへばいゝのに……阿父さん貴郎代理に腹を切てお遣ん被爲……父『イヤモー乃公ア自腹を切るのも嫌だなんて……役者の代理に阿父さんを舞臺へ出すなんてえのがございます、然うかと思ふと、お年を召たお方が嫌だが無據く牛に引れて善光寺詣り、お嬢さんが可愛の一心で御見物に參つたなんてえのは、隨分厄介なもんでげして、然ういふ方が幕が長いと退屈で堪りません　甲『もし源兵衛さん、どうも芝居へ來て見ると能うがすが、此人氣でプーンと來る奴が私は誠に腦が惱で性質ですから堪りませんよ、巨大な家でげすなア、突然に地震が來る此まア屋臺骨がミシといつた日にやア餘程の人死が出來ますなア　源『私も先刻

から然う思つて居りますが、どうでせう私は此通ひ口から向ふへ逃て木挽町の原へ出たら……　甲「左様でございます、私は築地へ立退うと思つて居りますが、徐々出懸げませうかつて、築地の海岸の方へ逃げて往つたと申しますが、餘り早過ますが、お嬢さん方の芝居へ入つしやる前は、此位の氣合があるには違ひございません、明日お芝居といふと前の晩寢られないと申ます、先日も腕車に乘てからに、人力がノロイからつて車屋を置て駈出した、お嬢さんがどざいましたが太變なもんでげす、十時に寢まして三時にお目を覺て全るで一番滝車へ乘る様で、夫からお化粧をして出掛けまして、芝居の周圍を三廻りして芝の用達をして、新橋へ來て御飯を食てブラ

〳〵明たなんてねのは困りますからなア、其保養はどの位だか知れません、又殿方の方は　○『今日は日躍だから今夜は一寸、洲崎なり北廓なり大千住なり、南千なり又は新宿品川元地へでも、出懸やせう君書籍を二冊賣給へ、なんて恐れ入ましたなア　乙「覺資を使ひ込でも氣力を付て置なくつちやア勇氣が出ん、學問も少し飽きたから大門を潜つて見やう、てえ様た書生さんも隨分有ますンでげして、此お女郎買もお金子を充分用意して遊びに行くお方達は■しうございますが、落語社會の樂屋連中なんと來ると、夫りやア實に儉約をして行くんでげして、夫で六十五錢使つて一週間欝ぎ　九十錢で二週間欝ぎ一圓十錢で一月欝んだから、行かない方が能い位なも

んだが扨然うは參りません、お若い内は一寸お魔が差して遊びに行くまいと思つてゐても鳥渡景氣に連られて、孫腕車に乗つて、ガラ〳〵と送られて、仲の町をズーッと行くんだが、先吉原でお茶屋の内儀さんの肩へ捕つて、幇間が扈從て藝者が隨行て女中が付て、仲の町をズッと突袖で歩いて、青樓へお出でになるのが先一等のお遊びでげせう、晝往つて晝歸るを上客、夜る往て夜る歸るを中客、夜る行つて朝歸るを下客、其又下客が流連け又其下客が馬引と極つて居りますが、吉原で勘定が足ない時に車屋さんに扱ばれて、大門を出るのは嬉しいもんぢやアありません、一夜撿校でマ遊ぶなら遊んで貰度うございます、愉快をしちまつて朝に成てアノ精算書が、

來ないとようございますが、是非書た物が一本繰出すんで勇氣が衰へて仕舞ひます、圓遊杯は那書が出なきやア獨身物でげすから、毎晩押掛ますが那書に出られちやア適ひませんからマ、悴と一所に寢て居りますが入費も一文も掛りません、隨分翌朝に成て那の精算書を見て鬱ぐ人が有ますからなア　○『源兵衛さん精算書が來ました、此書が來るだらうと思つて、昨夜から胸騒ぎがしてゐました、驚きましたなア和郎と私より外に、勘定をする人はありやアしません……オヤ此精算書の方を御覽よ……ナニ抱一さんの三幅對は見惚る程巧い、軸を譽るなら後で譽るがいゝぢやアないか、驚いたなナ、オーヤオヤ驚いた一圓なんてへ華魁を買ふにやア及ばなかつ

んだ、和郎と乃公の給金は月に二圓六十錢ぢやアないか、其内一圓六十錢喰雑用を減れるから、月に一圓宛の男だ、其奴が一圓の花魁を買ふてえのは魔が差したんだネ　源「和郎のは白玉に私の女は田毎といつたが、田毎所か寝言計りいつてゐやアがつて、仕方の無へ女だつて　○「私のは白玉だつて白ぐポラヤ愛嬌と、來りやア白玉だが色が蒼くつて、顔が方形だからトコロテンでげさア、那の女アラムネが惡い家が函館で一遍で氷々、從來は外妾だつていふが、心が解けないであんな酷い目に逢せやアがつて、座敷にゐるのは那の花魁のコロップだとよ……十三圓二十二錢でげさア、此内を二錢お負被爲て……　源「二錢計り直切たつて仕方が無へ、女郎買の

糠味噌汁を笑はれらア、抔と隨分後で直切る樣な事は幾らもございます、吾々のは今日は如何程より使はないと、山を極て行くんでげすからなア、宵の中から住た事はありません、寄席を閉場て行くんですから、先づ十一時、十一時一二分より遲くなるとお巡査さんから、お説諭を受けますから先づ十一時の閉場として、夫から樂屋で勘定して然うして行きますので、夫も車に乘てけば早いが鐵道馬車の線路を馳て行くんだから、石へ躓いて生爪を剝し　○「何故女郎買てえ者は足が痛いだらう、なんて……も一廓へ參りますと、二時過といふんで電氣の光り茫然として、鳥渡情夫遊びの左褄を取た姉さんが、チラリホラリ見ゐるんでげすが、夫りやア晴天の時の事

で、吾々の參るのは無論お天氣の好い日に行ないんだから……何故降てる時を覘つて行くかと申ますと、降てる時はお客が少ないだらうといふ考へだが、夫も少し位の降りぢやア參りません、先人の混雜む土曜が不可ず日曜が不可ず、大祭日が不可ずお彼岸が行ず、五節句が不可ませんよ　○『どんな日が宜い心持に遊べるだらうといふ内に天が吾々を憫み給ひ、行くのに極都合の宜い日を拵へてくれました、大雷公に大地震、大津波に大戰爭、吾妻山が噴火をするといふ騷ぎだから　○『サア占た期ういふ時には世間の人の氣が沈んで居るから、自然ア、いふ處は暇だらう茫然考へてゐる處へ、乃公が行たら屹度嬉しがるに其喜ぶ顏が見度い　……金子は六十三錢

より多からずといふ、事に考へて其歩いて行く足音なんてえ者は、大變な音で先方へ行くともう整然と戸が閉つて居ります、不寢番さんと申して女郎が遁出すと不可ない、客が逃出す情死があると不可ないといふのを拒ぐ爲の番人の帳場の中の番頭さんも、三時過でげすからコクリ〳〵座眠りをして居ります、處へ遣つて參りまして、

○『此家だな……と思ふとたんに滑つて轉んで、膝を戸へドンと叩き付たから、其音で不寢番も目を覺し　番『畜生……　○『どうも恐れ入りました畜生は感へたね　不『狸ぢやア無へかい』

○『鹿でございますよ　番『何でも獸類だと思つてゐたんだ、今明けますよ待てお在なさい　○『有難うございます……何だ、汝の

家の路次を叩く樣なもんだ　番『サア此方へお這入んなさい』

○『御免被下まし……中へ這入つてポンと後を閉られる、昔なら傳馬町の御牢内へ這入つた樣なもんで、上草履を穿うと思つたが會計六十五錢だと思ふと、氣の毒で草履も穿ず、裸足でトン〳〵〳〵登つて參りました、階子を登るのにトン〳〵〳〵と馳上るのは、不可ないのださうでげして、悠然上るのが御華族然として、奥床敷のださうでございます、トン〳〵〳〵と馳上るのは、内所へ借があつて顔を見られやしないかと、氣が咎めるからでげやせうが先日女郎屋の階子を二日掛つて上つた人がありましたが余り悠然過ぎます、扨奴さん部屋へ通ると若衆も　若『早く寢かして仕舞なくつち

やア騷々敷くつて不可ないと、光顯寺といふ細い頭の開いた、腰の窄んだ恐ろしい明るいなと思ふと、パッと暗く成て仕舞ふ蠟燭を點けて持て參りました、入費を出せば最と太い蠟燭も出すますが、破素法勘定もしない人達の爲に、斯ういふ蠟燭が特別に誂へてあるんでげすが、本人はトンとお構ひなし　○『若衆さん遲く來ましてお氣の毒樣でげす、早く來やうと思つてゐたんでげすが、ツイどうも遲くなりましてお負に車へ乘つた所が、其車がのろい車で大變遲くなりました　若『裸足でお出でん成た樣でげすな　○『堤で下車ましたんで……大門を入るせるのは氣の毒ですから、那所で下車て十五錢で極めたんだが二十錢遣りましたよ　若『堤　しちやア大變

泥が揚つて居ますなア　○『仲の町は道が惡く成ました　若『道の惡い理由はありません頃日道普請をしたんだから……　○『ヤア宜しい……若衆さん今夜は、極一ッ下直な遊びを遣つて見度い、お客然としない樣な乙な風流な茶人の好む樣な遊びを一ッ……』

若『どういふお趣向がありますな　○『九年母を一ッ願ひませう、此奴ウ剩で二房宛に別て皿へ置く樣な譯で、恐れ入ましたが鹽煎餅を二錢五厘梅干を二ッ、澤庵の尻尾の所を少し切て來て戴きませう夫からお序に鯡を二本に唐團子を三本と、南京豆を五合計り願ひ度いもので夫から玄蕃に水を一杯……　若『大變なお客が來たと思つたが家業の煩ひで仕方がないから、聽て其處へ食物をズーッと

並べました……がズン〳〵食そうなもんだが、南京豆一ッでも氣取て食物へ手を出しません、スルと廊下をトン〳〵〳〵といふ音がするかな　○『來たなと思ふとサア女郎が其所へぞろ〳〵押込で來ましたが、之は喰倒さうと思つて來たんでげして　乙『あら來やがつたよ　丙『何だつて如斯に遲く來たの嬉しいよ　丁『花魁未だ來ないノ』　○『未だ小生の情婦は御出張になりませんですが……

丁『眞實にお帥匠さん和郎が來たら、何か戴うと思つてゐたんですよ頂戴しやうか知らん……　○『まゐ何卒宜しくお喫んなすつて』とお許しが出たからムシャ〳〵〳〵、南京豆の皮ごと喰る位の、騷ぎでげすから忽ち清潔に片付て仕舞い　一同『お娛みです

ねえ』ブーイと皆消て了ひました　○『ヲヤ〳〵食物はなくなつて了ふ、暫時一人になるんだから心細い　若チ、此方へお休み被爲たら如何樣で……　○『何分宜しう願ひますといふんで、床へ這入らうとしたが、花の錦の飾り夜具二十計りを積み重ね……といふ結構な蒲團でない、錢を碌々使はないと見込が附てゐるんですから一昨日迄病院へ下つてゐた娼妓が敷て寢てゐたといふ、臭氣プーンと來る蒲團が敷てあります、其上へヌツと座つて　○『オヤ此りやあ甚いね、角ん所に綿があつて中央は單物だ、此方の角はこりや蚊帳だネ……ハヽヽ、綿がころ〳〵轉つて歩いてゐやあがる、大人國のお手玉見たいだ……モー女が來さうなもんだ、何をしてゐやあがるんどらう……あゝ了解た乃公が來たんで、伯母さんに捕つて今夜は花魁は宜い人が來たもんだから、大層急々してゐる事なんていはれるのが、口惜いもんだから我慢をして先方にゐるんだ、身体は先方にあつても魂魄は此方へ來てゐるんだ、之離魂病といふ恐れ入たなア、夫にしても來さうなもんだ、女が來ないと樂書が氣になる、屏風が逆さ屏風だ世心細いわけだなア……をや〳〵大變な事が壁に書てあらア……何だ『女郎買浮れ騷ぐは宜けれども心に掛る朝の勘定』何だシド……詰らねへ……『姉が女で妹が女中の私は男でござる』どうも樂書でもしやうといふ奴に、能い手跡の者は無いね、斯ういふ物を見てゐるのは一寸保養だネだが……

此所で一ッ屏風へ帶を掛度いんだな、帶を取て屏風へキユーと掛度いけれども、小倉ぢやあキユーと音がしないヲ……博多の方を締て來りやア宜かつたが、八十九錢で內神田の金子へ抵當ちまつた一圓十錢なきやア出ないもんだから、遂小倉の方へお手が附て了つたが、此屏風へ掛る帶ぢやあないね……だが頃日芝居で見たのは好かつたなア、音羽屋の鈴木主水で以て松之助の白糸で、末はどうして主水さん搦んだ綠の橋本屋といふ、時に主水が歸らうといふと後から帶を取て引張る奴が幕切れで、屏風ン所からスーッと帶の脫れたのは彼奴は好かつたが、此帶は小倉だから突張てお負に帶心が突張つてゐる尤も小倉の帶心は褌を生麩で張つたんだから詮方

がない、此帶は百本仕立て二圓五十錢位だつていふが安いもんさ……此帶で末はどうして主水さん搦んだ綠の橋本屋と、引張やア心が突張てゐるから必ず屏風が顚覆る、主水たる者が屏風の下に成て悶搔のはいゝもんぢやアない、たゞつちやさう手數が懸るな紙蒲を揚る樣だ、疊んで枕許へ置けば見やがるだらう、蒲團の下へ入れて置ばイヤ探られてヲヤ小倉の帶といはれるな、困つたなア斷然疊を揚て其下へ入れて置う、ハヽヽ、此所なら大丈夫發見りやすまい……煤掃が始つた樣で、一人して氣を揉でゐると女郎衆は、此間へ來るのは嫌だが雨降で相憎く客人がないから　女「口惜いけれども行つて遣れ」といふんで怒氣と口惜いのと合併して、足音は激しく

トン〳〵と來ると　○『婦人が來た……なと思ふから嬉しいのが逆上して、蒲團の上に湯卷一つで正座つて、目をパッチリ開て駄を搔てゐる　女『あら此人は死に切れないんだよ、遺言があるなら聞て進るから目を眠つてお仕舞い、抔て進るから……　○『ゑ、情けない』といふとたんに肩の所をポーンと打れると、大の男子がパッタリ倒れて了ひました『飯盛も陣屋位は傾ける』婦人の力量てえ者は大層なものでげす、圓遊の考へでは代議士に撰擧爲れないから大丈夫でけすが、萬一撰擧爲れて衆議院で演說滔々と演る時には、圓遊の考へでは女の兵隊を拵へて見やうといふ考へでげす、警者隊、權妻隊、娘隊、後家隊抔といふ隊を拵へて、戰場へ向け此方から徐々行くと向ふから、鐵砲擔いだ兵隊が押て來る　女『お止被爲よ鳥渡刀を頂戴よ、ヨー』といふ樣な事をいふと婦人には敵對いもんで　男『夫ちやア和女に進るよ』つてべ樣な言をいひます、女『鐵砲も被下なネー　男『あゝ進やうといふ樣な工合でれ〳〵してゐる所を此方へ眞誠の兵隊を伏勢にして置て突如に擊て化舞ふ圓遊の想像でげすから此位のもんでげす、お遊びにお出に成ますなれば、一夜撿校でお遊びが宜しうございます……　○『先花魁が來たから今夜は一人で占ちまはう、あゝ有難……といふんでデレ〳〵してゐる所へ、又後から一人階子をトン〳〵と上つて、花魁の部屋をがらりッと開て見るとゐないから、府縣の虫がビク〳〵

して來る、酸漿虫も疝氣の虫驚風の虫、眞田虫があがつて來て、

男『ヲイ若衆此所の家は明店かへ　若『大層遲く被入やいました、誰方樣……ヲヤ神田の勘ちやん、昨夜麻布の源さんに本所の庄助さん、四谷の與吉さん抔が根津の彌次郎平さんと一緒にお入來ん成ました　男『何をぐず〳〵いつてゐやアがるんだ　若『所が妙なもんでけすなアお寺の鐘がかん〳〵いつても、花魁が思ひ出して、あら神田の勘ちやんでゐ樣な言を被仰るんで、簞笥のカン見ても勘ちやんの勘だつてへますが、カン〳〵ノキウノヂてなんて飴屋が來ても今時分勘ちやんは、どうしてゐるだらうなんてへいひますが、眞實に和郎は色男でげすなア　男『何をべら〳〵饒舌やアがるのでへ

箒棒奴乃公が來だつて然ういつてくれ、直來なきや歸ら……

若『歸る〳〵は夫りや嘘だんべ、矢張所かの催促だんべ　男『ナニ……早くさういへ　若『へえ少々お控へ……あの豆どん該室へお燈火を持てお出で、此所で座敷を明るくして、置て例のお座敷へ參りまして障子の外から　若『花魁烏渡お顔を……女郎買に行つて花魁烏渡お顔を……と喰つたらあれが別れの幕でげして　○『オイ花魁……烏渡お顔を來たよ、該詞やアもうお客が來たと了解せるんだ、オイ花魁私が遊びに來ると屹と一寸お顔がある世、私は前の世に烏渡お顔をといふ奴を殺して、其奴が祟つてゐるに違ねえ無んだ　花『一寸お顔をだつて用事があるから呼びに來たんだね』

○『夫が用事がないんだよお客が來たんですよ、障子の外から鳥渡お顔といやア、お客が來たに違へ無へんだ早くお出でよ　花『嫌に此人は恪氣だよ、お前さんの妾は女房ぢやアないか、お前さんは妾の亭主だらう、自分の女房に余計客が附のだからいゝぢやアないか勤めの多い者がお職んなるのだよ、妾の出精を悅こばないかい、お預げ見たいな顔をしてクルッと廻つて忍んでお出で、和郎余ッ程狗に緣があるね、顔がムクだもの……嫌に身体だ黑で勘定を班にしてさ、夫で元は四足（士族）だなんでトグロを卷て寢やアがれ』

○『情けなしねえぞうも……　花『嫌に吠面搔て居やアがるよ、一服お上んなさい一人で寢てゐやアがれ……股をチクリと捻つて

向ふへ娼妓が行ちまうんでげす、後へ殘つて　○『ヲヤ〳〵恐れ入たなあ、女郎買に來て一服預けられて、一人殘りなんぞはいゝもんぢやアないや、あゝ股から血がドク〳〵出て來た、兎角色男は生傷か絶ないてえが全くさうだよ……お前さんの女房ぢやアないかつていやアがつた、エッヘゝゝ、だが彼奴は私に惚てゐるよ、余ッ程乃公に出來がいゝよ、ナーニ向ふに來てゐる奴が白痴に違いないや花魁が此方へ來て見ると　男『オイ花魁どうしたんだ　花『あらまア嫌だよお前はんを心待に待てたんだよ、眞實にお前はんの事計り思ひ續けて、寢ては夢起ては現幻のお前はんが來ないと、夢計り見てゐるよ、お前はんが昨晩踊つた夢を見たの　男『乃公が役者に

なつて舞臺でか……　花『イーエお神樂堂　男『ナニ神樂堂で：……面を被つてか　花『素面でさ……お前はんは眞實に外道丸出しだもの　男『何だと　花『否さ其外道面を妾の虫が好んだから、余まりい、男でない方が好なの、余まりい、男は外へ奪られる心配があるから、矢張べーロシャ面の方が安心だワ　男『何を吐しやアかるんでへ、今迄いゝ人の所にゐたんだらう　花『嫌に和郎も甚助だねえ、朝漬頭の菖子野郎……和郎の頭は梅干で、顏かチョーロケ、扮裝の拵へがテッカ味噌で親孝行もないもんだ、嫌に澤庵で此節錢がなくつて悄々してゐやアがるよ、奥に來てゐる奴は知つてる人だよ、あの馬鹿が來てゐるんだアね　男『ウム彼の馬鹿か』両方で同じ言詞をいつて居ります、遊廓なら探しのお話し次に申上げます。

錦魚の御拜謁

エ、相の連續こ夏季に相成るから金魚の拜謁といふ、お話しを短文に一席伺ひまする事で、エ、人間でも鳥畜類でも木茅草木でも、化ない者は無いと申まするが、就中人間抔は隨分此化る事に置きましては、小供が大人に成まする大人が老年ん無るといふ理由で、ずんゝ變つて參りますんでげすか、然し乍ら此人間は陰德を爲なけれ

ば不可んといふんで、實に當節は皆モー其慈善は陰德といふのが、日本の人民殘らずの頭へ感じて居ります樣な譯で……惠んだ時の心持といふものは好いもんでげして　甲『那奴の物を皆千籠給て遣つた、なんいとふのは餘り嬉しいもんでは御座いません、茲に本所にある金魚屋の六左衛門といふ人でございますか或は金魚の會がありまして、水道町の傍で武島町といふ處を通り掛り升ると、小兒が大勢集つてからに泉水の浚水をいたして居ります、水の出口の處へ池から金魚が一匹飛出して參りました、丸ッ子と申しましてからに、鳥渡種々な形狀をして泳ぐから面白い金魚でございます該魚を邪見に小兒がぐいと掴んで行うとする所へ其所は商賣でげすからお氣が

注れまして　六『兒さん愛兒は今其中から出て來た金魚を手捕にして家へ持つて行んだらうか、不愍に家へ行く迄には手の熱で以て死去つて仕舞ふがネどうだえ私に五錢計りで賣てくれないか　少『夫りやア叔父さんどうも有難えな、乃公にお金子へくれるなら有難へや此金魚進る世……　六『私に讓つてくれるか、ちやアお金子エ遣るから此金魚は貰つて行くよ……』小兒に五錢の銀貨を一ッ遣りまして、鳥渡手提の金魚入の中へ入れまして水を取替て遣りましたから、金魚は大喜びに喜んで居ります、用達をして宅へ歸つて、此魚を泉水に放したんでげすか、商賣人でございますから手置きが好いといんで、段々に育ちましたが、金魚抔は素人には商賣人の樣に、

一年兒、二年兒とずん〳〵巨大く成りませんが、其所は家業すくだから疾病氣もなく、大きく好い金魚になりました、六左衛門さんは太喜びで、旦那方が來ると是を見せるといふ譯でげして、夫婦乍ら大喜びでございました、或日の事六左衛門さんがお内儀さんより先へ起て女房に向ひ　六『お美津や　美『大層お早く……　六『あゝ今庭を掃除をして金魚の手當をして、此所へ來たんだが昨日まア家に金魚會があつて、お馴染の旦那方も多く御入やつた中に柳橋の藝者屋の主人が來て、家のあの乃公の好な更紗の丸ッ子ノー……』

美『はア……　六『那りやアまア、乃公が大刀葵といふ名を稱て金魚會の方でも鳥渡人に知られてゐる所から、柳橋の藝者屋の爺が

來て好い金魚だ、此魚を人間に育つて藝者にでもしたら賣れるだらうと斯ういふのよ、何も金魚が藝者になれる氣遣へないが、其所が商賣手だから鳥渡氣が注たんだが、其言をば家の金魚が感してなア……誠にごうも妾も武島町で小兒に摑まれた時に、和郎さんに助けられたから何か御恩返しをしやうと思つて居りまする處へ、今日藝者にしたら好からうといふ事を承り、氣が注きましたが何卒妾を藝者にして被下、然うして今迄の御恩を返しますからといふ事を女の姿で乃公の枕許へ來て判然然ういつたんだがな　美『極つてるよ然んな馬鹿な事が有ますかへ　六『夫がな明日の朝人間の姿で行くから、決して疑つてくれなると判然いつて、消ちまつたんだから

豈夫丸つ切嘘でもあるめへ　美『へエー奇体ちやア有ませんかネー……眞實でせうか　六『此奴が眞實だつた日にやア實に妙な話しだらうよ……　女『御免被下まし　六『オイ誰か臺所の方へ來たかなア　美『オー然う……此方へお上ん被爲　女『ハイ有難う存じます、何を隱しませう妾は金魚のお丸でございまして　六『之は驚いた……　女『昨晩貴郎に妾が夢知らせで申上げましたが、モウ實に和郎にはソノ非常な御恩に相成て居りまする、命を助けられた親方でございますから、何ぞ御恩返しをしやうと思つて……マ𪜈身代は失禮乍ら餘り御有福にお暮し遊ばすらしくもございませんから、柳橋で藝者んなつて𪜈恩返しをいたさうと思つて居りますんで……　六『どうも此りやア驚いたねへ、全く和女さんは當家の丸ッ子でございますか　丸『お疑ひ遊ばすなれば、庭の池の中を簾を揚て見て被下まし　六『然うかねえ……　和女鳥渡見て來ておくれ　美『はい』といひ乍ら庭へ來て簾を揚て池の中を見ると丸ッ子が居りません　美『良人さん眞實にまア居りませんよ、和女は眞當に當家の金魚で……　丸『はい全くの丸ッ子でございます、何卒妾は後ともいはず、直ぐ藝者んなり度うございますからお連れ遊ばして　六『爾うかい、ちやア折角の深切を無にするでもないから、今頃往つたら吉田屋の主人もゐるだらうから行う、車を……』　丸『いえ車は及びません　六『歩いて行くかい　丸『いゑ手桶ん中

へ入て提て往て戴きれますば宜うございます　六『どうも藝者を手桶ん中へ入て往くのは可笑しいちやアないか……　丸『可笑しくつても宜しうございます、手桶の儘で表口へ置て被下て、お話しが出來ましたら柏子を三つ打つと中から出て、人間の姿になり先様の家へ這入りますから……　六『成程……ちやア手桶に水を一杯……』と其所へ持て參りました　六『這入る時はどうするネ』　丸『あの貴郎が柏手を三ッ打て被下ると中へ這入ます　六『好うございますな……めうだなアどうも一い二ふ三い……此りやア奇体だ飛込で泳いでちア　美『不測ですねへ……好く氣を注けてね折角の別嬪を餘まり動搖つて鼻でも打つと不可ないから……とい

ふんで、六さん氣を注乍ら二人乗へ手桶を載て、吉田屋へ遣つて參り、格子を開て中へ這入り、靴脱ん所へ手桶を置きまして　六『お早うございます　主『ヤー誰かと思つたら本所の親方、大層早いね儲口かへ　六『ゑゝ、旦那何でげす頃日藝者を一人抱へ度いといふ事を被仰いましたなア　主『はア……和郎さん所は、あゝ遣つて多く婦人方も出這入りをするから、萬一然ういふ話しでもありやアしないかと思つて、鳥渡然う申したが何かありますかへ　六『何卒一ッ百兩許りで抱へて戴き度んでげすが、どうでげせう　主『百圓も出さんことはありませんが、年頃は幾歳位い　六『何でげすなア年頃は五年子でございますがな　六『何を……　六『其何でげ

すよ五年子で　主「五年子……なら子供だねえ　六「夫で中々巨大いんです、年齢は五年子でげすが、どうしても十八九に見えます　主「何所にゐるんです　六「靴脱に居ますんで、手を三ヘエー　ッ叩くと出て參ります……一い二ふ三いサ此方へお這入被爲……　丸「誠にどうも有難う……　亭「オヤ變だせ立派な娘が這入つて來た……和女さんお在に成つたの……　丸「はい屈膝で居りました　亭「冷ると不可ないよ　六「否冷ないんです、決して冷えません、却て暖かい方が不可ないんでげす　亭「ハ、ア燒性だつていふんで、腹の燒る性質が幾らもあります……此方へお出で被爲　丸「はい有難う存じます何分共に願ます　亭「中々好い娘だ、

鳥渡丸ッ子だねゑ　六「へえ……　亭「丸ッ子だね　六「へゑ能くは存知でございます　亭「丸いか細長へか、目の前にゐる者が分らぬゑ奴がある者か　六「へえ宜しうございます……　亭「夫りやア好いが、どうです和郎さんの眞實のお娘子なんでげすかえ」　六「いえ拾ひッ子でございます　亭「大層な物を拾つたねえ何幾の時……　六「左樣でございます先づ二年子に拾ひました　亭「何所で　六「溝ん中から　亭「ヘエー邪慳な親があるちんだなア」　六「例での事、子供に握り殺される所を助けて遣りましたんで」　亭「何爲ても好かつたねえ御兄弟はありますかえ　六「ヘエー兄弟は大勢ございます　亭「幾人許り……　六「幾人と申して數限

無くウジャ〳〵ゐるんでげすが重立た兄弟は黒田様へ一人、宮様方えも二三人上つて居ります　亭『大層な處へ上つてゐるねえ』

六『ヘエー兄弟は仕合せでございますが、此者一人誠に魔が惡いんでげして　亭『ウーム好い衣物だねえ、上着が水にアメンボの摸様で鳥渡高尚な拵へだな、八高摸様になつて下着は更紗は好いね』

六『此者は中々〳〵扮裝は凝て居ります……　亭『藝は出來ますか』

六『藝は何でげす色々な事をします、鯱鉾立が上手で夫に倒に立つて鼻を疊へ押付てコー尻尾を……いえなに足を立て躍りますが、實に巧いもんで　亭『此りやア可笑いねえ、定めしお客が喜ぶだらう……又姐さんお客に餘まり褒られて泳ぎ出しちやア不可ませんよ　六『夫りやアモ泳いでも大丈夫なんでげす、餘り鹽水が不可ませんがな　亭『人に箱り込むと不可ないよ、淺い内はいゝが余まり深くなると……不可ないよ　丸『ハイ色々有難うございます

亭『何爲てもお互に我儘をいふ樣になれば、何を食さしても是は嫌ひですといふからいゝが、最初の内は遠慮を爲れると困るから、何が好だか好な物を聞て置かなくつちやア不可ねねが、どんな者がすきですな　六『好な物は子子でございます　亭『何を……　六『イエソノー……鰊が大好でございます　亭『いゝねえ精進物の好な女が隨分あるもんだよ、鰊なんぞはいゝ、是から夏季になりますと衞生になります、朝は飯前に牛の乳抔は飲らないかへ　六『牛の乳

は遣りませうが、ぢ飯は不可ません目が飛出しますから　亭『目が飛出しちやア困るね、兎に角此柳橋といふ處は、夏季になると船で出ますから落ない様にしないと大變だよ　六『大抵な處なら沒落ても大丈夫助かります、水泳を知つて居りますから……　亭『へゑ—此りやア驚いた泳ぎ迄心得てゐるのは感心だ、どうも柳橋適當といふ女子だ、どうだへ烏渡コ—咽なんぞはどうでげす　六『然う惡くもございませんよ　亭『一ッ聞度いちやアどざいませんか』

六『宜しうございます……ちやア一ッ語てお聞せヤしな　丸『ハイ……と丸が三味線を手に取つて清本を一段語りました、主人は悉皆氣に入つちまつて　亭『ア、—い、、聲だなア……　六『ナ

—ニ實は金魚でございます』

素人力

エ、一席相變らずのお饒舌をいたしますが、又暫時のお笑ひを願ひます事で『話し下手笑ひ上手に助けられ』とか申しましてお客様の方でお笑ひがあると知らず〳〵氣が乘て參ります様な事で、此お笑方にも色々甲乙がありまして、忠臣藏笑ひなんて鼻でフ、ンでお仕舞ひになります、又義太夫笑ひとヤしましてエヘッヘ、といふ笑ひ方で、那りやア落語の方には不可ませんでげして、蛙笑ひといふの

はがた〳〵、げた〳〵と笑ふんでげすが、何んだか色氣がありません、然し此のお若い時には色々なことをお好み遊ばして　甲『私は何卒一ッ變つた着物を着て歩き度い、並の着物も飽たから洋服へ上下を着て歩行て見やう、兜を被つて鉢巻をしてカバフトへ往ちまはう、抔といふのは未だ能うございますが、お若い内はお女郎買を被爲ん方はありません、一晩でも花魁に逢んと工合が惡いといふんで、然うなると遊惰に流れて自分で自分が分らん樣になります、

甲『我身で我身が分らない……（鼻唄）てへ樣な呑氣な事をいつてゐる、之が爲に居候と昔から極つて居ります』『居候置て合ずゐて合ず、居候三杯目にはソッと出し』　亭『和郎さん何ですかい、當家の

家内が那んなにグズ〳〵いつても、能く我慢してゐられますねへ』

若『外へ行つたつて食ふ事が出來ませんや、和郎さんはマア砲兵工廠へ炭を毀しに行て十錢宛貰つてお出被爲……』　亭『幾ら取ても能うございます　若『否さ君の財産調べに來たんぢやア無いから、幾ら取てもいゝが、君はマア私を幾分か世話をする義務があると見えて、僕を保護つてくれるが妻君のグズ〳〵屋八釜敷屋には驚いたね、今不在だから御忠告ヲ上るが那りやア離縁をした方がお爲んなります也　亭『ヲヤ憚り樣ですねえ、女房の事迄お差圖被下てどうも驚いたね……然しどんな事をしましたえ　若『頃日僕が何日になく早く朝起を遣りまして臺所で楊枝を使つて居りました　亭『へ

―何時に……　若『十一時四十五分　亭『余まり早かア無いや』

若『スルト貴郎ん所の奥さん、御新造、ワイフ、が臺所へ駈出して

來て瓶ん中へ柄杓を突込で、がらん〳〵と遣つたからモウ切符が間

に合ひますまい、もう金杉位迄行つちまつたでせう　亭『夫やア何

ぢい眞似ですへ　若『がら〳〵ンも二つの内は間に合ふが、がら〳〵

〳〵ンと來た日にやア、もう無益です此の通り瓶ん中に水が無いか

ら、汲で來てお呉ん被爲といふ謎でさア……夫から其所で私が一

ツ威張たねへ、箒捧奴へ水を汲む樣な居候とはヘン人間が少し違ロ

アてへ樣な顏付で、遂々汲ずに顏を洗つて了つたのは能かつたが、

ぢ飯で復讐ア爲れたにやア驚いた、居候は一文無し財產少なしと來

てゐるから、外でぢ飯を食る事が出來ますまい、顏を洗つて御膳へ

向つてぢ飯を食べやうと思ふと、内儀さんが貴郎は御飯抔をよそは

しては良人に濟みませんから妾がお給仕をいたしませうといふから

恐れ入りますと茶碗を出すと片方に　丼へ水が汲で杓子が冷してあ

る、此水氣の付た杓子でフワリとよそつて御覽じろ、中空ンドーの

上高盛、嵯峨に小室御飯、盤台山飯の……　亭『色んな名があり

ますな　若『枚擧するに遑あらずで其飯へお茶を掛て御覽被爲、下

がらんと來てゐるから盛た御飯がポコンと底へ落る、之を名付けて

積つた雪に小便飯、八せん飯の入梅飯（お茶澤山）さくといふと無く

なつて了ひますから運動飯の、掛聲飯、憐れ愍然涙飯と來ました、

さく〳〵と遣り度いがさくでお了にやりましたから、憚り樣と二杯目を出すと大層お食が進けますねへ、お湯ですか楊枝ですかといはれてもう御飯の緣が離れて了つたから、へゐといつて了ひましたらう、スルト妻君が其味を占めて、以後毎日其傳を遣られるから腹が空て堪りません……何かい、工風をと段々考へますと、人間は何でも苦勞をしなくつちやア不可ませんな、お宅の御飯を一粒も減さんで、腹を滿腹くする事を考へましたよ　亭「へえー　若「どうも鐵瓶の蓋が湯氣で揚る所から氣罐車を發明する世の中だからでげせうが、私は家の飯を減さんで腹を滿腹く爲る事を考へましたが、農商務省へ願うと思つてゐるんでげす……專賣特許でも……ネー

どうでせう　亭「へえー大變な事を發明しましたねへ、どういふ工風に爲るんでげすへ　若「抑も貴郎の顏にも係はらず、又當家の姐さんの名前も出んで、家の飯も食ずして腹の膨れる大發明の原因といふのは　亭「然う勿休を付ずに早くお聞かせ被爲な　若「へえ……此向ふに清元延猫さんといふ師匠があるでせう　亭「ハアありますよ　若「那の師匠が疊屋の金さんに入揚て了つて、頭日象牙の撥を小柳町の金子へ三兩二分で質に入たのを知つてます　亭「大變な事を知つてるなアどうも……　若「夫から飯を食ふ事を考へました　亭「へえー妙な所から考へましたねへ　若「私が延猫さんの家へ飛込で往てお師匠さん、今肴の骨を咽へ立てましたが、どうし

たら抜けませうと斯ういふ、スルトア夫りやア象牙の撥で撫ると直りますといはうと思つたが相憎質に這入つてゐる無いや、其所で延猫さんが御飯の固凝りを飲むと直りますよといふ……私の家の御飯は軟柔で固凝りが有りますだらうが、今稽古中で手が放されませんから、御隨意にお出し被爲てと來る……占た……有難うがすといふんで、臺所へ飛込でお櫃の蓋を取た時の嬉しさ　亭『へエー若『お櫃の中を見た時は、熱い浪がポロリと出ましたよ、夫から呑込だの呑込ないのといつて、此位の握飯を六十八、鮭が有つたから其品を燒てお茶漬を六杯食て歸る時に、鍋を二枚懐中へ入れて來ました　亭『へえ―呆れたもんだねゐ　若『此位にして貴郎ん所の御

飯を助けてゐるのに、妻君が邪見にするには驚いた　亭『ハ、、、郎相當の發明だ　若『イーエ未だ一ッ發明した事があるんで搗屋み考へました、是こそ大臣の許可を受てしても耻しからぬ所の大發明亭『大發明も目的に成らないからなア　若『此りやア屹度儲かりますれ　亭『どういふ發明でげすへ　若『上下で搗事を考へましたんで、那の搗屋てゐ者は杵を下へ下す時は米を搗くんだが、上へ揚る時の杵が無駄に成りませう　亭『成程……　若『其所で下へ臼を一ッ置て上へ臼を逆樣に一ッ吊して（搗屋の眞似）斯う遣るんです、目出度ア〳〵の若松さんよー、來たヤレサッサーイ……　亭『此りやア驚いたねへ、人間てえ者は目懸に寄らんもんだ感心だねへ……

……然し上を搗くのは恐れ入たが上の米がバラ〳〵落こつて來ませう　若『アッ然う〳〵其所は未だ考へが注なかつた』　亭『大方然んな事だらうと思つてゐた……　若『之が不可なければどうしても車引でげすなア……　亭『怠惰者の癖に車夫に成りますかい　若『成度つて仕樣が無い津田三藏の事件から此方へ、どうか車引ん成度いと思つてゐます、先車を引て大津へ行く津田三藏が皇太子へ斬付る、私が三藏の足をすくふ、こう百五十圓に勳章頂戴と來る、然う成たら君に五十圓も遣る、遠慮を爲ずに取て置け……　亭『何をいつてるんです、モー然んな事は有りやアしません　若『無いとも限つた事は有りません、私が車を引始めたら探す者が有る、頃日春木座へ見物

に行くと恰好音羽屋が車引で（聲色）小川町迄……何とかで三萬圓卷七やうと岩吉が傷持つ足の提灯を後日の證據に（カチ）音羽屋アといつた時に、私の傍に見てゐた二十五六の年增が、〳〵いふ車引が有つたらば家の財産は皆な遣つちまうといつたのを慌かに耳へ止て居ります、其所で私が車を引て歩く其年增に邂逅て、亭主に成る財産を皆な貰ふ……　亭『又始めたせ又私に幾らかくれるんでせう其女の家は……　若『家は何所だか其所は知りませんが、必定出逢ふだらうと、いふ覺悟でげす　亭『貴郎は然ういふ變り者だから、然んな樂でも無くつちやア出來ますまいから、夫を樂みに早速車アお引きなさい、然し引いた事が有ますかい　若『其心が有るから

二人乘で稽古をしました　亭「夫りやア感心だ　若「頃日九段坂の上で車屋にもし五十錢進るから私を乘けて、九段を馳け降りて見ないかといふと、ヘイ宜しいと私を乘けてくれました、刺ッ子を着て火事頭巾を被つて膏藥を用意して、坂の上からズーッと降たが其早い事、どうしても止りませんなア　亭「夫はやア險難だつた……へエーどうしました　若「夫から私が助けてくれ〳〵人殺しイといふ所へ、憲兵隊が梶棒を押へてくれたが有難いもんで、ア、遣つて歩いてゐるのは車を押へる爲だとみて……此役人が梶棒を放する又がら〳〵〳〵ッと遂々　俎橋迄走つて墜落ましたが、上へ昇るのはどうしても登れませんが、下るのは何所迄も行きます　亭「危

い事をする人だ止た方が好うございますせ、然ういふ工合ぢや都度都度に客に怪我をさして、遂には自分が大怪我をする樣な事をしそうだ　若「ナーニ大丈夫です之でも遣ります　亭「符牒抔を知つてますかい　若「整然んと覺えました、ゲンコ（五錢）ドテ（十錢）ヤリ（廿五錢）オイ先ア切つてくれてへ樣な事をいふんでげす、夫に唄ひ込なんて　亭「唄ひ込みてへのは何の事ですへ　若「何だか其處は知りませんが何か唄ふんでげせう（鼻唄）河風寒〳〵千鳥鳴く―てへ樣な事をいふ　亭「然んな事をいつて歩きやアお巡りさんに拘引されらア、車は何處で借るんです　若「表の質屋に意氣な一人乘がありますから、もう借込で油を塗て引く計りに成つて居ります、貴郎の

實印か無くつちやア貸てくれませんから默つて出して押て來ましたが、大層好い實印ですねへ何處でお拵へん成たんです　亭『エヽ……人の實印を默つて使ふ人が有りますかい、マア何か有る所を好く知つてるねえ……　若『先日區役所から歸つてお在被爲た時に納ふ所を見て置きました　亭『怖いなア此人は……　若『向ふの用箪笥の抽斗に五圓紙幣が二枚有りませう、和郎のゐない時に方々探したんだ　亭『アヽ氣味の惡い人だ何でも知つてる筈だ、人の家を家探し爲る人も無いもんだ……ちやアアヽ今日からお遣ん被爲……　若『有難い……コレ御覽被爲、整然と此下に旨縞の筒ッ抱に旨縞の股引腹掛迄掛てゐます、どうです粹でげせう……夫に

お客を落して萬一怪我でも爲せた時の用意に、膏藥迄持てゐるんです、お客を落す向臑を摺り剝く、ヘイお塗なさいと膏藥を出すでせう、其所で那の車屋は感心だと遂にお政府へ聞へて、車引には殊勝な奴だと警視總監からは褒美を貰ふ……　亭『貰ふ事計り心得てゐるねへ　若『先此位な心得の車引てえ者は外に無いといふても好い位なものぢやア、往て參ります……ゴンサイ〳〵〳〵、ゴンサイ〳〵　甲『エヽ吃驚した大きな聲をしやアがつて梶棒を振てゐやアがらー　若『今日は車引の開業で未だ馴ないから仕方が有りません……ジトーヲケ車屋の懸聲で驚く樣な事ぢやア、東京の眞ン中にゐられるもんか……ゴンサイ〳〵自然に蹌跟るのが妙だよ、エ

、ゴンサイ〳〵鳥渡此容子を頃日春木座で逢た年増に見せて遣り度いねへ……鳥渡那所へ來た車屋さんは好い男ぢやア無いか、福助に似てゐるよと來るだらう　其所で一寸私が福助然と　唇を長くして（福助の聲色）もしい車賃抔は要りません何所でも無錢で參りますなア、といふ、アラ嬉しい事ネ、一寸家橘に似てゐるよと來たら、（家橘の聲色）貴女車にお乘なさい車賃は要りません、色々な聲をする……アラ鳥渡菊五郎に似てゐる事ねへと來らア（菊五郎の聲色）もし御新造さん車にお乘なせへな車賃は戴きやせんや、鳥渡團十郎丸出しねへ（團十郎の聲色）四海兄弟の世の中なれば唯で誰方もお乘なさい、あれ容子が女寅髪髷だわと來る（女寅の聲色）もし〳〵車に

お乘遊ばせ車賃は、ア戴きやせぬ……ゴンサイ〳〵〳〵容子が松助にもと來るだらう（松助の聲色）もし車をお召なさいな車賃は戴きやアしませんや、目付が芝翫にも似てゐる事と來らア（芝翫の聲色）もし車にお乘なないクルマーチンは戴きません、あら如燕にもといふだらう（如燕の聲色）さア〳〵車にお乘被爲車賃抔は爭でお貰ひ申しませう、鳥渡桃林にもといはア（桃林の聲色）何卒車賃は戴きませんでございます」に由てお乘下し置れまする樣に……鼻のピンとした所がブラックにもと來るよ（ブラックの聲色）サ車に乘てお呉ん被爲やし車のお錢は戴きやせん、色んな聲をすらア、するとネー那んな粹な車屋さんに引せるのは勿体無いから、和女車ア引てお遣りと

いふんで、年増のお供に尾てゐる下女が車を引て、私と年増と相乘をすると年増がいふには、貴郎其身拵では妾が極りが惡いから此肩掛を卷て頂戴な……へえ有難たうぞんじます、あら嫌ですねえ女房の物を禮をいふ奴が有るものですか、夫ぢやア貸てくれ、アラ嬉しい事ねへ……　職人『ヤイ此ン畜生痛へちやア無へか、梶棒を横に振る奴があるけい　若『ヤ是は不思議な御緣で……　職『何が不思議な御緣だい此の野郎　若『此廣い往來で人も多く歩いてゐる中に貴郎へ突當るてへのは餘程深いお緣と見えます、一河の流れ一樹の蔭袖摺逢ふも他生の緣、突當るのも何かの因緣、親類と見做して十錢被下……　職『ヤイ〳〵何をいやアがるんだ、乃公に突

當つて置やアがつて十錢くれろとは何事だい、狂氣なら勘辨もして遣るが正氣ぢやア勘辨成らねえ、此間抜野郎……　若『ハ、、、乃公が女と相乘をしてゐるものだから、羨しがつてゐやアがる……先此所に雁張てゐよう、大層別嬪が行くね……もし親方ア車は如何樣で……　車夫『小哥は車を引てゐるんだ　若『其車は貴郎んですか、大層汚い車でげすなアもし親方車は……　男『私ア牛の乳配りだよ　若『おや〳〵……もし貴郎車は……ヲット調練だ困つたなア車に乘ない人計りだ　甲『ア有難へ、オイ兄弟車があらア乘うぢやア無へか　乙『和郎と乃公と車に乘と何日でも墮落ちる、前の世の車引を殺したに違ひない、屹度前世の惡事が尾て廻つ

てゐるんだね　甲『然ういふ譯でも有るめへが、運惡くして落るんだ、頃日は日本橋鞘町から鏡橋迄六度墮落つたぢやア無いか』

乙『無理は無へや相乘一錢だもの……　甲『提灯は盆提灯で先祖代々と書た奴を提て、車夫は夜具の上に蕩を着て尻を端折て陣笠を被り、鉢巻をして全で彰義隊の脱走の樣だつたつけ　乙『然う〳〵逐々仕舞は提灯を持たせられたには驚いたね　甲『西洋杖で提灯を差上て霜燒の藥と間違ひられたのは那の時だ　若『親方車は如何でげすな　甲『並木迄片手（五錢）位ぢやどうだね　若『結構です、片手と被仰いますと五萬圓も五千圓も五十圓も五圓も五十錢も、片手でげすが中を取て五圓もくれますか　甲『洋行爲るんぢやア無いよ

淺草へ行くんだせ、五錢だよ　若『宜い……　乙『乃公アもう車は前例が惡いから、墜落としちやア嫌だせ　若『大丈夫……もし墮落ちりやア整然と貝殼の内に仕込であります、血がドン〳〵出る一件を付る殊勝な奴だ、ほ褒美頂戴と來まさア、サアお召被爲まし　甲『兄弟鳥渡此車屋さんは身拵が氣が利てゐるなア、車も奇麗だし　乙『然ふよ同じ錢を出して乘るなら、斯ういふ車へ乘らねへのは嘘だ　若『さア梶が上りますよ　乙『オット承知だ、然し兄弟和郎は落るのは覺悟の前かい……　甲『マア極つてゐる樣なものだから先刻から口の内で念佛を唱へてゐらア　乙『オヤ〳〵……早く出を上てお呉れ　若『いよ〳〵梶が上りますよ、腰を引て足を向ふへ

ウンと張て……　乙『乃公ア下車るよ、今の内に引退つた方がお爲ん成るせ、腰を引て足を張れてへのは何だへ　甲『腰を引て足を張りやア引くのに輕いだらう、輕けりやア北廓へ飛す威勢の好い一人乘が拔るぢやア無いか　乙『然うかい……和郎のいふ通り腰を退て足を張りました　若『有難うございます、肩を並べて顏を揃へて……　乙『乃公ア下車るよ、全で錢を出して叱られてゐるんだ何だか肩を並べて顏を揃へてへのは……　甲『行儀が好いぢやア無いか、小笠原流の車だ二人乘へ乘て肩を出したり、顏を出して居ると落ちた時に、怪我をする、車屋のいふ通り肱を落して顏を揃へて、箱ん中へチョコナンと這入つてゐれば、譬へ轉倒返つても、

怪我をしない事は妙だよ　乙『然ういかい……和郎のいふ通り肩を並べて顏を揃へました　若『有難うございます双方見合て　乙『オヤ那んな事をいふせ　甲『お互ひに見合てゐれば、忘れた事を思ひ出すぢやア無いか　乙『兄弟和郎は中々車の方の事は巧者だねへ……和郎のいふ通り双方顏を見合ました　若『有難うございます……ゴンサイ〳〵〳〵　乙『兄弟乃公ア如斯痛い車は始めて乘かつた、ボカと來そうだなア　甲『小言をいつちやア不可ねへ、曲引だよ、是で落る樣で落ないんだ　若『ナーニ落た所が怪我位でげす』　乙『オヤ嫌だせ　甲『大丈夫だてへ事よ　乙『大丈夫だつて車屋さんモー曲引は澤山だよ、大分頭へ血が逆上つて來たから、どうかし

てお呉れ　若『ちやア徐々歩きますよ、ゴンサイ〳〵い、心持でげせう　乙『ナニい、心持なもんか、兄弟大變にお辭義をしてゐるなア　甲『和郎だつて矢張遣つてらア……失禮が無くつていゝや、誰にでもお辭義をしてゐるんだから　若『駈て來たので、熱くつて不可ませんから煽いで被下な　甲『驚いたねへ（後から扇で煽り乍ら）歳前通りを後から煽いでる風は無いなア、ハ、、、往來の人が笑つてゐらア……オヤ車屋さん、風へ向つて唾液をするのは止てお呉れ　若『いえ澤山は懸りません　乙『オヤ向ふから知つてる人が來たぜ、今日は……ナニ安い車に乘たからです……と然うぢやア有りませんよ、無據なく煽いでるんで、左樣ならア、笑つ

て往やアがる、唯乘けて貰つたとでも思つてゐるだらう　乙『アヽ、一恐れ入た、どうも一生懸命に來た故か疲勞れて目が眩んで仕舞つて、モー向ふから來る者が見えません、もし鐵道馬車に突當つたら夫迄の壽命だと諦めて被下、私は何所迄も眞直に行きますから、天王橋（須賀橋）の所はお氣をお注なすつて……河ん中へポカと飛び込むと不可ませんから　乙『戯談ぢやア無いぜ、如斯車は始めて乘た、驚いちまつたなアどうも……　男『ヤー其所へ車を引て行く若且那今日は……　若『誰だ……　男『若且那小生でげす』　若『ヤー誰かと思つたら櫻川どうしたへ、正孝久しく逢なかつたなア　櫻『恐れ入ましたな、どうも何だつて如斯事を……ハヽ、アア了

解た柳橋の藝者が北廓へ繰込に就て、何か御趣向が有るんですな」

若『もう昔から勘當てへ樣な身体ん成て、然んな粹な事は出來ない身体だから、無據なく他家へ居候をしてゐて實は年增を乘けやうと思つて車引ん成た所が、如斯デブ〳〵、肥滿つた重い奴が乘りやアがつて此ン畜生　乙『兄弟乃公は降りるよ此畜生つていつてるぜ』

甲『感心　乙『何が感心だ　櫻『ちやア若旦那、私も色々貴郎に御厄介に成りましたから、其御恩報しに一ッ私が後押をしませう、ナニ譯やア有りません如斯奴の兩人位は……　乙『全るで喧嘩だ一人車屋が殖たぜ　櫻『（後から兩人の客の頭を押）如斯野郎の兩人位ゐ何だ、此ン畜生……

客『モシ、然う私達の頭を押しちやア

痛いよ、前へ突ン反つて仕舞はア　櫻『ナーニ構もんか……ゴンサイ〳〵〳〵　若『ゴンサイ〳〵〳〵速く成た……　櫻『ゴンサイ〳〵〳〵ホーラ郵便箱を引繰返した、オツト子供を三人打倒した……ゴンサイ〳〵ガラ〳〵〳〵どたんと墜落しました　若『ホラ落ちましたらう御褒美の端縮が開て來た、お怪我しましたらう、さ澤山お付被爲（貝殼を出す）　乙『兄弟此奴ア頃日のと同役だぜ』

若『私のは膏藥でございます』

成田小僧

エー彼の先代の柳枝の持ち話とヤます成田小僧といふ極く饒舌りな小僧さんが深川の松本へ參るお話を今様に改正して一席辨じ上げます、當今では小供衆も大分進歩んで參りまして何んでも大人を遠廻はしに釣出すやうナ事に相成ましたもう十三四才位で立派に小學校を卒業なさるかと思ふと五十六才八ヶ月で初等六級を落第するなかといふのだから中々肯きませんが子供は何地で遊んでゐらッしやッても少しヅヽお遊びの變てゐまするのは誠に不思議でございます先

般も圓遊が丁度下谷の二長町邊を通行ますると坊ちやん方が三人集て裁判子ッ子をなすつてゐらしやいました　○『アノお願ひ申ます　△『何んぢやナ　○『お役人さまにお伺ひ申ますがアノ燈心の論で　△『ウン是は山吹の枝から燈心は取るんだてえと、此子が然うぢやない、私は山吹の枝からも疊の目からも出んで皆行燈の抽疊の目をすくと出るんだてエますが何說が眞正ですか御裁判を願ひます　△『ウン是は山吹の枝からも疊の目からも出んで皆行燈の抽斗から出るぞ』と機智い事を申ました何んでも住んでる所の風に染るといふは奇態な者でげす　旦『ジャアマア和郎は全体どうも誠に口數が多くて困るよ些と默てるが宜い　小『へ――……だつて尊公がね用だてねから茲へ來たんです、御用てエのは何んです尊公、御

用だてエから用かと思つたんです他の者がアヽ長どん何にか旦那が御用だてエから早くお往でてエから嬉しいやうな怖いやうな變的箇ナ心持で來たんです何にか遣て下さいナ　旦『アヽ……彼れだもの爲やうが無えの……其方は口から先へ生れた奴に違え無え』

小『イエどうでしたか夢中で生れましたので私の生れる時に阿母さんが無暗にいきんだそうで其中生れッちまつたんですが何んなら一寸往つて取揚げ婆アさんに聞いて來まやうか　旦『エ――……餘計ナ事をいふナ眞正にしやうがねえ……悴や此奴にはどうも誠に困りますよ和郎が餘まり可愛いがるもんだから段々增長してしやうが有りやアしねえ過般も乃公の隨行をして頭へ痰を吐ッかけやアがつ

たから何故斯んな事をするど叱言をいつたら平生は飛び越ずんだが今日は好く往なかつたてえやがるして見ると折々行るんだ　小『へエ……誠にお氣の毒さまで　旦『チョッ何にがお氣の毒さまでは若旦『コレ長松何故然う一々阿父さんを面折るんだよ……今日は尊臺不動さまえ　旦『ムウ予は代參を遣る所存だから　若『神信心のお出掛けですから今日は御勘辨を願ひます　旦『不動さまに免じて勘忍して遣るが以來氣を注けろ　小『へゝお小言は成丈け烈しくなく不動が宜うございます　旦『あんな事をいやアがる　小『今日は不動さまへお參りに往らッしやるんですか、道理で譴責を食ひませした尊公、金加羅童子私は勢多加童子番頭は八大童子三十六童子で

譴責を食ふのは一番大鈍痴だ　旦「しやうのねエ奴だ一々何にかい
ひやアがる……悴や和郎些と小言をいつてくんな　若「へえ其代
はりお參から歸て參つたら土藏の中へ入れて三日も出さん事にいた
します……歸たら見やアがれ土藏へ投り込んで出さんから然う思
ツてろ　小「へえ有難うございます　旦「アレだ禮をいつてやアが
る……何んで禮をいふんだ　小「三日四日樂寢が出來らア」
若「然んナ事をいふと一月も二月も出さんから然う思てろ　小「八
月たつたら出すだらう出さんと流れますよ　旦「質だと思てやアが
る、しやうのねえ奴だ……早く往て來い　小「早く往て來いたッ
て然うは參れません自然法体と歩行いて往くんで其邊にお氣が付か

れやせんか年に不足もなく然んな事をいふと品位が下りやすせ隊長
手毛列のパアー！　旦「パアー抔を入れやアがッて眞實にしやうが無
えノウ……早く往つて來い　若「へえ往て參ります　小「へえ往
て參ります……眞正に驚いたな早く行て來いなんテ……門外へ
出るといゝ心持ちだなア若旦那〳〵　若「何んだい　小「大旦那は
無暗に宅で八釜敷小言計りいつてますから世間で然ういつてますせ
鳶が鷹アア生んだつて阿父さんが鳶で尊公が鷹でてえます世眞實に感
心やい驚々　若「何んだよ騒々しい些と默て歩行きア阿父に大變叱
られたから小言賃に何にか馳走て遣らうか　小「エー馳走て下さい
お汁粉は忌だなア　若「南京豆鹽煎餅　豌豆に湯煮小豆はどうだ」

小『安い物計りいんですネ深川の平清か松本で御飯が食てえな』

若『生利な事をいふな小供の癖に御飯が食ひてえなんて　小『小供だつて人間ですものお腹が空けばお飯ア食べます隊長頼むせ』

若『何んだ隊長なんて眞正に困る奴だ　小『早く車引に乘て、から〳〵と行きてえなオイ若衆さん〳〵　若『何んだつて人車夫を呼んだよ　小『若い衆さんこう汚い車は行けないよ二人乘は困ッちまう、梶棒の反た底の深い、心棒に草鞋が八思半ぶら下てるのには免蒙むる俺等は商法人だから十露盤上で乘るがあの紹色の車がいゝな、目倉縞い筒袖腹掛後鉢巻をしてるのが威勢がいゝな……若旦那早くお乘んなさい　若『コヽレサ無暗に乘ッちまッては往けない

直段も定めずに乘てはしやうがないナ　小『直段だつて若旦那大底程があります一里何錢とチャンと極てやすから警察署へ行たッて変番へ出たッて然んなことは驚きやせん……若衆さんモット急いで行きねゑ　若『何故扇で若衆の背を打つんだ　小『打つたッて……嬉しいッウン嬉しいな若旦那人力車は日本の發明だてえますが然んな事は少し心得てなければなりやせんね嬉しいな向ふに見える煙突から煙が出てゐるが火事ぢやアないか知ら……いやー金鍔を食てやアがる一個食てえな而白えな　若『少し默て行きなよ　小『何にかいひながら行かなくつちア可笑しく有ません若旦那』　若『うん小『尊公に繪草紙屋のお蝶さんが戀着てさすよ　若『馬鹿な事をい

つてどうして小供に然んな事が解るものか　小『小供だつて一概にはいへません俺見たやうなものも有ます三千九百萬撰抜きの器械の龜の甲小僧ッてんですが繪草紙屋のお蝶さんや何にが・裏の裁縫の師匠の所で稽古してゐながら尊公の事を家橘に似てゐるッてへですが、若旦那ア何にかくれても宜いや……嬉しいな、人間が陸續逋るが皆んな男と女計りだうん嬉しいな……オット若衆其所で宜しい結搆ッノ松本の此方の所へ梶棒を突いてお呉れ……チョット茶屋のお座敷の寸法を聞いて見ませう……へゐ今日は御免下さいまし　女『コレハ入らッしやいましお伴さん御苦勞さま　小『姉ゐさんお伴さん御苦勞さまてえのは失敬でせう、俺だつて同じ人間だ、

何方が主人で何方が家來だか解りもしねえ内に俺を捕めゐてお伴さんてえのはどういふ譯です一番議論に及びませう　女『ホヽコレハ妾が過言りましたネ直正にまア宜うこそ御入來で先日は有難う』

小『なに今日始めて上たんで　女『ホヽ今日は誠に結搆なお天氣さまで　小『生憎曇天てゐまして誠にお氣の毒さま　女『異正に口の輕い小僧さんでゐらッしやる事　小『へえ何貫目ありまして俺の口の貫量を衡た事がありますか　女『アラマア顏から火が出ますよ』

小『物騷な顏だ和女の顏はマチ入らず　女『あらどうも何にも妾にはいへません左樣なら　小『姉えさん俺は今來た計りですお願みヤやすせ……ネエ若旦那ア　若『何んだなべら〳〵饒舌つて……

お女中誠に濟みません此者は小供の癖に誠にお饒舌りな奴で唯今も小言を申た計りゆえどうぞ御勘辨を願ひます　女『いえどういたしまして小僧さんのいふ事が眞正でございます　小『若旦那アズッとお上り遊ばせ笑アせやアがる無暗に遣り詰められて堪まるもんか文明國の明治ッ子だ……嬉しい、姉さんお座敷は何方だね　女『ハイ此方へ……　小『イヤー成程これはいゝ座敷だ　女『へえお敷物を　小『イヤー縮緬の上等のお布團か此上へ乘ると公方さまに成たやうだ俺のと若旦那のとお揃ひだが此布團は安くは出來めエ此切は一尺何程位えだらう　若『然んな事をいふなよ　小『お茶屋は眞正に主人も家來も布團がお揃ひだから感心だ……イヤー　お茶菓子

に蒸羊羹が二タッ切ございますのは二人で一ッ切ッゝ食べるんでせう　若『五月蠅なア　小『オヤ又跡から二ッ來た　若『食ひたけりア食いなよ　小『嬉しいな斯う二タ切ッ・出すのは噴嚏が出來ると行けないからでせう　若『誰が菓子なんぞで噴嚏アする奴があるものか　小『どうも感心若旦那一個貰公召上れな　若『宜いから食ひなよ　小『半紙を一枚戴いて此菓子を斯う包んで袂へ入ッちまつてさうしてお跡のを一ッと……　女『お誂ひ物は　小『成丈上等になすつて下さい……嬉しいな中々いゝお座敷だ床の間の容子から違ひ棚の工合が古風だねエイヤー向ふの泉水は潮入りだ緋鯉が麩を食べて、やアがらア龜の甲三匹甲を乾してる……いやア嬉しいな杯

洗が來た〳〵若旦那金の杯洗が來ましたから御覽なさいよ觀音さま の洗手鉢百分一下嬶が跡からお銚子を持て來ましたヨオヤ〳〵後か らお膳も來ました……コレハ尊公のお膳ですヨとこれは俺のお膳 だよとお膳やお膳重いと輕いが感心だよ　若「何にをいってるんだ な　小「九谷のお皿に青地の鉢で硝子が三個お膳に乗てるのは感心 ですね……姉えさん憚りさまお酌をオッと酒は燗肴は氣取り酌は タボか姉さんもタボの端暮……と姉さん怒りッこなし〳〵四海皆 兄弟だからね憚りさま中々上等お酒ですねこれが當時評判の正宗と いふんでせう　若「余計な事をいふなヨ　小「嬉しいな……一合 六錢位しませう　若「何故價を聞んだ見共ない……姉さん御免下

さい　小「姉さん煮肴が先で刺身が後で前後しても宜いから出來た ものをずん〳〵持て來て下さい　女「畏りました　小「若旦那小 僧のお酌でお氣の毒さま……オット覆れた勿体ない　若「何故ッ ヴ疊をべろ〳〵舐るんだヨ　小「早く何にか喰ひてゑな　若「宜い から先さへお喫り　小「お喫りたッて貴公より先へ小僧が喰べては 法律に背くやうな者で　若「面倒臭い事をいふな許すから先きへ喰べ ろ　小「うん嬉しいなイヤー味噌汁が這入てる……此方のお碗は 何んだらうイヤー何んだお飯が這入てらア……貴公に此方のを進 げませう嬉しいなお先きへ頂戴いたします中々美味な、宅の乾菜の 味噌汁たア達はア、變に臭くねえからね……田舍味噌も斯うすれ

ば喰る、此味噌は矢張十六屋で買たのか知ら、料理番に半助遣りていが生憎一錢も無えや宿下りの時に小使ひ三十錢だから心細いなゝ十錢で土産を買てくと跡二十錢しか無い中で二區鐵道馬車へ乘ると殘十六錢さやア無えが今年は五十錢になるかも知れねえ……アゝ美味は美味が碗中にお肴がモウ無いよ　若『何故箸でお椀を突付いてるんだ無ければ澤山お替はりをして食べな　小『餘り美味いから碗ごと食べやうと思た位で……オット若旦那〳〵　若『エヽー喫驚した　小『藝者が來たから御覽なさいよ御覽なさいッたら御覽さいよ、美い婦女ですからさア藝者が便所へ來ましたから若旦那御覽なさいよ、美い婦女だが島田が少し曲てるね、髮の亂れ髮枕の咎よ

夫を和郎に疑ぐられといふ三下り頭髮を御覽なさいよ便所へ這入りましたよ　若『しやうのねえ奴だな……知てるよちよつ袂を放せ　小『これはちと恐入りました咬へ煙管で煙草を喫んで澄しても行けませんよ、若旦那見度なら見度といッちまう方が一等罪が減じます　若『知ってるよ……アッヽ……其方のお蔭で雁首を頰へ押付けた……些と默てろ馬鹿ア　小『イヤー是は驚きました是りや驚いた　若『先刻から知てる〳〵といふに無暗に騷ぎやアがつて何所の奥さんだかお嬢さんだか知れもしない人を藝者なんていつて若し失禮があつたらどうする　小『宜い面ん皮だ……お嬢さんか奥さん

か解らねエやうな小僧たァ小僧が違ひます、藝者も藝者面も貴公の戀慕てる藝者なんで……氣があれば眼も口程に物をいふてえ譬の通りで貴公の顔を横濱の火事を小石川で見るやうに、かすかに見てましたが餘程戀慕てる證據がありやす　若「何んで戀慕てる證據があるんだ　小「だッてサ若旦郡アノ藝者が便所の戸へ手を掛けながら、下谷の法華宗の講中見たやうに七五三に眼を附けて貴公のお顔を見る樣な見ない樣な……夫でも大抵寸法が知れまさアネ夫から小便をして仕舞て外へ出て手を洗ッちまつてから手拭で手を拭いて何時までも懷中から白紙を出して口で紙を取ては手を拭き其紙屑を捻て放棄りながら邪見な顔をしてとん〳〵〳〵と往ッちまいました

が若旦那あの紙屑を拾て來ませうか……　若「紙屑なんと拾て來なくても宜い　小「エ！お銚子が參りましたお熱い處を一口……姉さん此方へ〳〵　女「へゐお變はり目……お手許拜見　小「若旦那俺がお酌をいたしませうか……宜いから召上れ〳〵、姉エさんお酌を賴みます……へえ若旦那からお使ひ物さアーンと口をお開きアーんとお開きなさいたらソウお膳の側へ置いて困りまスナ……然んなら俺が食ッちまふ　若「オイ夫れは予の箸だョ」

小「然んなら俺の箸と取替へませうか　若「同じ事だしやうがねえな　小「へゝ嬉しいな……姉さん一寸伺ひますがネ今用場へ藝者一人來たんでげすが俺は藝者だといふに此者は……　若「何んだ

此者とは　小『失禮御免下さい、若旦那がいふには何所の奥さんだかお嬢さんだか知れないのに然んな事をいつて失禮が有たらどうするッてポカ〳〵〳〵拳骨を頂戴したんだが何ん程主と家來だッて、憲法發布も有る所で無暗に毆打れる位なら人民同權もない譯だのに餘計な事をいふなッてポカ〳〵〳〵とお出なすッたんだが藝者が眞正か奥さんが眞正か一ッ御裁判を願エ度ネ　女『どうも恐入りました事……若旦那此事は貴公がお負けなさいましたよ彼は山谷堀の大和屋の小千代さんといふ藝者衆で木場のお客さまの一座で割間の正孝さんに花洲さんの二人が來てですがもう御飯も召上てお歸りになる處です　小『へえ何んですかイヤー大和屋の小千代姉さんです

といやア俺ア知てます　若『其方アどうして藝者を知てるんだ』　小『ナニネ過般俺が本郷へお遣ひに行た時に切通しで方々の書生さん方が集て寫眞を見てゐましたから俺も立て見てえると書生さん方が美い藝者だノウッて小千代さんの事をいつてたんだへ代價は一枚二錢五厘　若『何をいつてやがる　小『併し寫眞顔より見た方が美うげす……ちよいと姉さん〳〵　女『はい　小『アノ藝者衆と一緒に成て御飯を食べてえんですが一寸茲へお出張りを願度ねのだが、俺が然ういつたッて小千代さんに花洲さんに正孝ウ……お膳を三個お肴を見繕てお酒は麥酒ブランデー、アルコールサンパン泡盛葡萄酒甘酒に白酒をどつしり持て來てお呉れ、アヽ

|早晩に藝者衆が來るんだネ嬉しいネ若旦那　若『何するてんだ馬鹿ア　小『ア痛いまたポカリは驚きましたナ斯んナ痛いどうち茶屋はないネ　若『馬鹿奴眞正に予は茲へ來たエさへ驚いてゐる所だのに、又藝者だの幇間を呼ぶとは何んだ此上藝者や幇間を呼んだら何の位消費か知れやアしねえ　小『何せ些ッぢア入費が掛りまさアネ先五十兩お出しなさい　若『何んだと五十兩……茶屋へ來た事さへ阿父さんに知れたらばうしやうかと思てる所だのに五十兩も消費て見ろ、予は勘當されなけりやならない　小『大丈夫ですよ、御心配なさるな長男除きは出來やアしませんからお案じなさるナ親子の縁の切れなく成たは正政御維新の政府の有難い處でげす、學問をなすッて少しヅヽ愉快をするが人間の眞正の所でげす、貴公は家を潰しますよ賣家を唐樣で書く三代目ではありませんが、併し一旦潰した上で貴公のお力で再ひ身上を取返すのが眞正の人間ぢやアありませんか、感心な小僧だと譽めて好うございませう、併し美い婦女でげせう、どうも先刻両方で變手箇でした也、先方でニッコリ此方でニッコリ合せて四ッコリ笑ひや何にかしたから訝しいな……何んだつて是から彼の藝者が茲へ來れば大變な事に成ッちまふんだ、人オッケ若旦那アデレ〳〵しッちまいませう　若『然んな事がある ものか……早く先方へ行つて斷つて來い　小『斷れッたッて、一旦來いッたんだもの斷わりやうがないや……先方の藝者は今頃惚

氣てゐませうアノチョイと正孝さん花洲さん聞いてお呉れよ下のお座敷にね、何家のお子息さんと小僧さんがゐたんだが私はソノ子息さんに岡惚れをしたノ……姉さん何んか頂戴か何にかいつてる所へ行つて、斷わりをいふのは御免を蒙りやせう、アラ眞正に行けないねえ、つて癪でも起されると是れ即ち人命に拘はる一大事』と、是より此小僧さんの取持ちで好い情交になるといふ小千代清三郎別れ初めのお話てございます。

エー昨今に至りますと諸方へ學校も開けました事でございまして、小供衆のお智慧の進むで來たといふは、實に之れが日本盛大の原因といつて好しい位で、圓遊ども抔は別に學問も有りませんから、好

い年齢をして小供衆に敎はるやうな事が度々ございますでございますが、併し先達圓遊も驚きましたのは、小供衆の前で嘘りお化……と申したら　○圓遊文明國に幽靈はありませんよ』と謂はれまして大きに恥入りました位のものでございます、だが併し夫れもお年齢に成ましといふと、チョイと恭順い御子息さんや、嬢さま方が何樣に夫やア學力が有ても魔の刺すてえ事が有ます、鳥居數を漸々潜てから少壯時の事を考へますと隨分恥入る事が幾件もございますが往時は戀煩ひ抔といふ病氣が有ました、現今では然ういふ病氣はなく成た代りに、他の病氣が殖ました、虎烈刺病とか、乃至は蛛虫我は又僂麻質斯、肋膜炎いろ〳〵あります、圓遊然とした人間が

痩衰へてゐる所へ友達が來て　○『どうしたね、甚く此節は鬱悶でゐるぢやアないか　△『あゝ、戀煩ひで……』と言た處が容貌にありません、先圓遊どもは病氣の方なら痔てエもんか、乃至は痞背骨になるとか、何とか然ういふ風の病氣なら宜しい位でございますが、戀煩ひは幾らもありました、隨分泥水稼業の者で夫りアどうもありました　○『あの藝者はどうもいかん、此娼妓はいかん抔と一口に被仰いますが、どうして中々其社會へ這入て見ますと、左樣なもの計りでは有ません、夫りアどうして親孝行もあれば、貞女両夫に見えずといふ、賢女なり、貞女なり、烈女なり、トコまかしてヨイトコショ……是は餘計のお話でげすが泥水稼業の社會に隨分實

着い者が幾らもあります　婆『エー御免なさい……眞に御無沙汰をいたしました　○『オヤ之れはお珍らしうございますな、何やお新やなんだよ、三谷堀の大和屋の老母さんがお入來に成たよ　新『オヤまア久しくお目に係りませんでした、つい鼻の先に居りますからちよいと參堂なければならないと思ひながら私事にかまけて御無沙汰になり何だかお目に係るのも實にお恥かしいやうな譯で、マ些とお上んなさいまし　婆『眞に御無沙汰をしました、此所を山谷堀とは僅かな所ですから、吾儕もちよいと來やうと思つても心持ばかりで……何日も御繁昌で　新『どういたしまして繁昌處ではありません、今日は那方へお出掛でございます　婆『いえ吾儕は當家を差

して參たので、何日もお奇麗に掃除が届いてね、御商賣も繁昌で本當に結構ですね　新『どういたしまして、いけません　婆『眞にどうもお奇麗で、吾儕は本當にお羨ましく思てゐます　新『どういたしまして汚穢ッていけません、良人は無性ですから　婆『なに花州さんは無性所ぢやアありませんよ時に今日參堂たのは他の事ではありませんが、宅の小千代が鹽梅が惡くッてグヅ〳〵してえて本當に困りますノ、ハーい……モー三月か四月に成りますが、身体が不快なつちました……六月頃から今日までブラ〳〵病魔で、其病の原は和郎さんも御存じの本郷春木町の塗物屋あの十一屋の江崎の若旦那清三郎はんぬ　花『ホー、成程　婆『夫が此節些ともお入來がない所からの病なのです、實は小千代が清さんに馬鹿惚れをしてゐるんですね、若旦那の事ばかり思つてるんで、實は他所に少し好いお客さまが有つて、先方へ嫁に行れる口ですから、何樣かして其所へ遣らうと思つても、何だか吾儕が意地の惡い事をいふやうで、若い者と口は合ひますまいが、吾儕が夫をいふと頻りに否がるんですが、吾儕は其方へ遣め度と思つてゐますよ、本郷の子息さんはお宅にゐないやうな事をいふので、手紙を出してお返詞のない所を見れば全く在つしやらないので、苦慮々々しく本當に無情といつて、プラ〳〵病に成ちまひましたが、和郎さんは一番彼の氣に入てゐますノ、夫れで和郎さんお賴みに來たの　花『是は恐入ります、私が

姉さんのお氣に入る事はありませんが、ぢやア私は直に參りませう

婆『あの此品は眞に詰らん物ですが……　花『お氣の毒ですね、

お新やお老母さんにお土産を戴いたよ　妻『眞に何日も戴きますば

かりで……　婆『どういたしまして、吾儕も氣ばかり此當家へ來

やうと思ましても両方好い事はありません、けれども心はあるんで

すヨ、實は去年の暮に來やうと思ひましたが、押詰て何だか種々用

がありましてく、彼の春の出の着物も餘り押詰ると紺屋が忙がしくつ

ていけない、染め惡い、人中へ出るのだから、染は筑千さんに賴ん

で、夫が出來上て見ると本當に好く出來ましたから、早速參堂うと

思つてゐます中に、一月は用が多くつて仕年始客が來ますし、年齢

を老ても矢張り正月は正月のやうな心持がいたしますから、年

寄も浮れ出して仕舞ひ、婦女は春先は奇麗にしなければならない、

川柳『松の内我女房にちッと惚れ』掃除でも好くしやうと思ひまして

其中に七草も過ぎちまい、十一日十二日に藏開きだし、又十五日十

六日は宿下子が來ますし、宅の親戚がありませんで、彼見忙しいし

二十日正月も過ぎて二月は參堂うと思ひまするとその二月はお長家の

お稲荷さまがあるんですよ、本當に差配がお稲荷さま氣狂ひで、丁

度吾儕ン所が月番で、矢臺を拵へるノ、子供の遊ぶ所を拵へるのと

いふからお祭入用を一軒六錢づゝにしたら宜らうと吾儕が集めに歩

行く、其中に臥龍梅や王子のお供に行き、今日は向島で、明日は池